稗田・若槻遺跡
平城京南方遺跡

2012年
大和郡山市教育委員会

稗田・若槻遺跡
平城京南方遺跡

平城京南方遺跡　二本柱列遺構（東から、羅城門跡地を奥に望む）

例　言

1．本書は大和郡山市に所在する稗田・若槻遺跡と平城京南方遺跡で実施した発掘調査の報告書である。

2．本書に収録した調査は下記２件の事業に伴う事前発掘調査で、どちらも大和郡山市教育委員会が実施した。

遺跡名	調査原因（届出者）	調査期間	調査面積
稗田・若槻遺跡	市道高田稗田美濃庄線舗装（大和郡山市※）	1998（平成10）年２月10日～３月23日 2007（平成19）年11月26日～翌年２月16日	200㎡ 650㎡
平城京南方遺跡	給油所・コンビニエンスストア建設（三井石油㈱・㈱ローソン）	2011（平成23）年８月４日～８月24日	190㎡

※主管は道路建設課→道路河川課

3．調査は下記の組織（当時）で実施した。

		稗田・若槻1997年度	稗田・若槻2007年度	平城京南方遺跡
調査事務		大和郡山市建設部 道路建設課	大和郡山市建設部 道路河川課	大和郡山市教育委員会 生涯学習課
調査機関			大和郡山市教育委員会	
調査組織	教育長	岩田吉郎	山田勝美	赤井繁夫
	教育部長	佐野寛弘	木下平一	田中利明
	社会教育課長 生涯学習課長※1	植田博史	寺前良昭	井戸西一男
	文化財係長	吉村典悦※2	服部伊久男	服部伊久男
	調査担当	（技術吏員） 濵口芳郎	（技術員） 十文字健	（主事補） 十文字健

※1　2008年度以降
※2　社会教育課長補佐兼務

4．本書で使用する座標系は世界測地系第Ⅵ座標系を用い、方位は座標北を示す。ただし、過去の成果との整合にあたり、日本測地系による成果を引用した場合がある。その場合は文中や図中に明記した。標高は東京湾平均海面（T.P.）からの値である。

5．遺物実測図の縮尺は瓦・土器類を1/4、銭貨を1/1に統一した。また、図中の断面は須恵器を黒塗り、瓦と瓦質土器類をアミカケ、その他を白抜きとした。遺物に付した番号は本書を通しての連続番号とし、写真図版中の番号も対応する。

6．註や参考文献は各章末に示した。

7．遺物写真の縮尺は特に統一していない。

8．平城京南方遺跡の調査にあたり、三井石油㈱および㈱ローソンには格段の便宜を図っていただいた。記して感謝します。

9．調査および報告書作成には下記の諸氏の参加があった。

神野悠、河合純子、川崎幸彦、須田史、西垣遼、松坂有香、丸山香代（五十音順、敬称略）

10．調査および報告書作成にあたり、下記の方々のご教示・ご指導があった。記して感謝します。

青柳泰介、今尾文昭、大西貴夫、小澤毅、後藤愛弓、佐々木好直、佐藤亜聖、重見泰、清水康二、鈴木裕明、鶴見泰寿、豊岡卓之、箱崎和久、橋本義則、林部均、福西貴彦、松吉祐希、持田大輔、山中章（五十音順、敬称略）

11．本書の執筆と編集は十文字がおこなった。ただし、第Ⅱ章－２－Ａは、調査担当である濵口が執筆した終了報告を掲載したものである。

12．調査に関する写真・実測図・出土遺物はすべて大和郡山市教育委員会が保管している。広く活用されたい。

目　次

第Ⅰ章　序言

1．はじめに …… 1
2．遺跡の環境 …… 2
　A　地理的環境　　B　歴史的環境

第Ⅱ章　稗田・若槻遺跡の調査

1．周辺の既往の調査 …… 7
2．1997年度調査の成果 …… 9
　A　調査の概要　　B　遺物
3．2007年度調査の成果 …… 13
　A　調査の概要と経過　　B　層序と遺構　　C　遺物

第Ⅲ章　平城京南方遺跡の調査

1．周辺の既往の調査 …… 23
2．調査の成果 …… 25
　A　調査の概要と経過　　B　層序と遺構　　C　遺物

第Ⅳ章　総括

1．稗田・若槻遺跡 …… 33
　A　遺構の変遷　　B　調査地周辺の旧地形　　C　下ツ道の関連遺構
2．平城京南方遺跡 …… 39
　A　遺構の変遷　　B　二本柱列遺構の評価
3．おわりに …… 45

挿図目次

図1．調査地位置図 …… 扉
図2．調査地位置図 …… 1
図3．調査地と周辺の主な遺跡 …… 3
図4．調査地と周辺における既往の調査 …… 7
図5．調査区配置図 …… 8
図6．1997年度調査区平面図 …… 9
図7．土層柱状模式図 …… 10
図8．下ツ道東側溝平面図・土層図 …… 10
図9．下ツ道東側溝出土遺物 …… 12
図10．包含層出土銭貨 …… 13
図11．2007年度調査区配置図 …… 13
図12．西地区1tr.平面図・東壁面土層図 …… 15
図13．西地区2tr.平面図・東壁面土層図 …… 16
図14．西地区3tr.平面図・北東壁面土層図 …… 17
図15．東地区1tr.平面図・北壁面土層図 …… 18
図16．東地区2・3tr.平面図・北壁面土層図 …… 19
図17．東地区4tr.平面図・南壁面土層図 …… 20
図18．東地区4tr.溝3出土土器 …… 21
図19．各遺構出土土器 …… 22
図20．調査地位置図 …… 23
図21．調査区配置図 …… 24
図22．調査区平面図 …… 25
図23．調査区土層図 …… 27
図24．斜行溝07土層図 …… 28
図25．二本柱列遺構実測図 …… 28
図26．主要遺構横断図 …… 29
図27．土坑12実測図 …… 30
図28．溝09・11、土坑13の重複関係 …… 30

図29. 平城京南方遺跡出土瓦 …… 31
図30. 平城京南方遺跡出土土器 …… 32
図31. 調査区の土層柱状模式図 …… 34
図32. 下ツ道関連遺構 …… 35
図33. 稗田・若槻遺跡における下ツ道関連遺構 …… 38
図34. 奈良時代の遺構変遷模式図 …… 40
図35. 九条大路周辺の既往の調査 …… 42

表目次

表1. 調査地周辺の既往の調査 …… 8
表2. 出土瓦の重量 …… 31
表3. 下ツ道の幅員 …… 36
表4. 下ツ道東側溝一覧 …… 37
表5. 遺構心国土座標値一覧 …… 39
表6. 二本柱列遺構中心の国土座標値 …… 41
表7. 九条大路周辺の調査一覧 …… 44

図版目次

口絵　平城京南方遺跡　二本柱列遺構
稗田・若槻遺跡1997年度調査
図版1　1・2. 調査区全景
　　3. 下ツ道
図版2　1. 下ツ道
　　2.　同　路面
　　3.　同　路面上の堆積
　　4.　同　東側溝
　　5.　同　東側溝の堆積
　　6.　同　東側溝黒色土器出土状況
　　7. 下ツ道東側溝西方の小溝
　　8. 調査区東端の土坑
稗田・若槻遺跡2007年度調査
図版3　1・2. 調査地遠景
図版4　1. 東西両地区合成
　　2. 西地区全景
　　3. 東地区全景
図版5　1. 西地区1tr.
　　2. 西地区2tr.
　　3・4. 西地区3tr.
図版6　1. 西地区3tr. 溝1・2
　　2.　同　溝1
　　3.　同　溝2
図版7　1. 西地区3tr. 溝1底の遺物出土状況
　　2. 東地区1tr.
　　3.　同　溝1
図版8　1. 東地区2tr.
　　2.　同　溝1
　　3.　同　土坑1
　　4. 東地区3tr.・4tr.
図版9　1. 東地区4tr.
　　2.　同　溝1・2
　　3.　同　溝3
平城京南方遺跡
図版10　1・2. 調査区全景
　　3. 調査区北半
図版11　1. 二本柱列遺構周辺の遺構検出状況
　　2・3. 二本柱列遺構
図版12　1. 二本柱列遺構と溝09
　　2～5. 二本柱列遺構の各柱穴
図版13　1. 溝09
　　2. 溝01
　　3. 土坑12
遺物
図版14　稗田・若槻遺跡1997年度　下ツ道東側溝出土土器類①
図版15　同　②、包含層出土銭貨
図版16　稗田・若槻遺跡2007年度　土器
図版17　平城京南方遺跡　瓦
図版18　平城京南方遺跡　土器

本　文

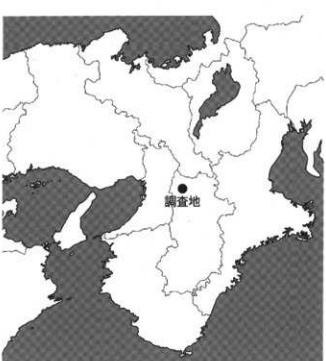


図1．調査地位置図

第Ⅰ章　序言

1．はじめに

本書には、大和郡山市稗田町に所在する稗田・若槻遺跡と、同下三橋町に所在する平城京南方遺跡の発掘調査成果を収録した。

稗田・若槻遺跡の調査は、市道高田稗田美濃庄線の建設に先立つ発掘調査である。調査は事業の進捗に合わせて２回に分けておこなった。１期目の調査は、1997年に通知された道路東半部を対象として1998年２月10日から３月23日におこなった。２期目の調査は2007年に通知された事業地西半部分を対象として同年11月26日から2008年２月16日におこなった。平城京南方遺跡については、2011年に三井石油株式会社と株式会社ローソンから発掘届が提出された給油所とコンビニエンスストア建設に伴う発掘調査である。調査は同年８月４日から24日にかけておこなった。

調査原因となった各事業については、市道高田稗田美濃庄線は2010年に全線が共用開始され、給油所・コンビニエンスストアは調査終了後ただちに着工し2012年に工事が終了している。

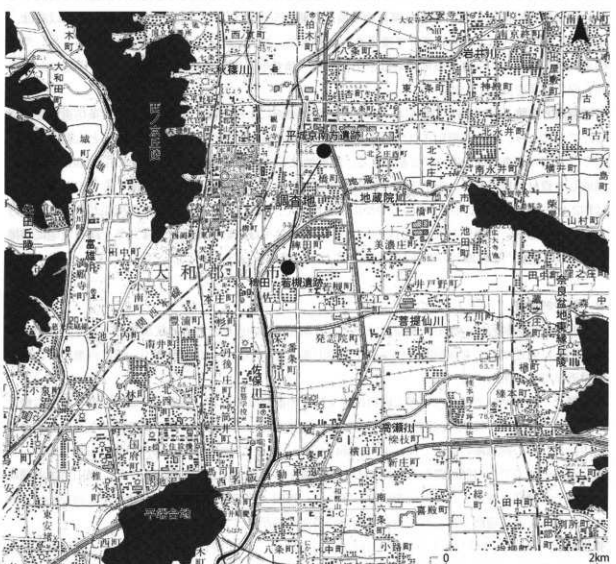


図２．調査地位置図(1/50000)

2．遺跡の環境

A　地理的環境

今回報告する二遺跡は、奈良盆地の北部にあたる低地に立地している。まずは遺跡周辺の地形を概観したい。大和郡山市の中央部には、盆地北半の主要な河川のひとつである佐保川が南流している。佐保川は北東方の春日山地を発し、盆地の北半を囲む各丘陵から発した大小の河川を合わせて南流し、平端台地を過ぎた盆地の中央付近で大和川本流となる初瀬川に合流して大阪へ抜ける。市内で佐保川に合流する河川には、盆地西縁を南北にのびる西ノ京丘陵の東縁を流れる秋篠川、盆地東縁の丘陵地から西流する地蔵院川、菩提仙川、高瀬川がある。両遺跡は佐保川とこれに合流する各河川によって形成された氾濫原上に位置している。すなわち、稗田・若槻遺跡は、佐保川、地蔵院川、菩提仙川によって、平城京南方遺跡は、佐保川、地蔵院川、秋篠川によって形成された氾濫原上に立地した遺跡である。

稗田・若槻遺跡　稗田・若槻遺跡は、稗田町と若槻町に位置する縄文時代から平安時代にかけての遺跡である。遺跡として周知されている範囲は南北約1.2㎞、東西約１㎞と広範囲である。今回の調査地は、遺跡内では中央のやや北よりに位置し、地蔵院川が大きく南に流れを変えて佐保川に合流する手前の低湿な氾濫原に相当する。調査地の周辺は昭和50年代以降に宅地化が進んだ。それ以前は、現在でも宅地化されていない部分で確認できるように、条里地割を良く残す水田地帯であった。今回の調査地の現況は、一部が畑地で他は水田である。調査地の標高は48.4～48.7mで、ゆるやかに南西方向に標高を減じている。

平城京南方遺跡　平城京南方遺跡は、2005年の発掘調査により平城京九条大路以南で条坊遺構を確認したことにより、新たに周知された遺跡である。範囲は南北約530m、東西約4200mと広範囲だが、以下は今回の調査地周辺について記述する。調査地は下三橋町に位置し、現況は水田を1982年に盛土造成した資材置場である。現地表面の標高は約51.9mおよび約53.2mで、南に接する水田面との比高は約2.4mである。南に向かってゆるやかに下る地形で、調査地の西約350mに佐保川が流れる。北方は市街化が進み、旧地形を残す部分は少ない。調査地は平城京の復元条坊では九条大路推定地に隣接しており、羅城門や羅城との関係からも注目される一帯であった。

B　歴史的環境

本節では両遺跡周辺の歴史的環境について、時期を遺跡の盛期である古代までに限って考古学の成果を中心に記述する。対象範囲は佐保川左岸の氾濫原を中心とし、北は秋篠川、南は高瀬川が合流する付近までの一帯とする。

縄文時代　この地域で最も古い考古資料は縄文時代の前期まで遡る。高瀬川流域に位置する南六條北ミノ遺跡では前期と後期の河川を調査している。近接する八条北遺跡では自然流路から後期の土器が出土した。この両遺跡の周辺では、近年、郡山ジャンクション建設に伴う調査が進められており、八条北遺跡の西方では自然流路から宮滝式の、包含層から元住吉山式の土器が出土し、横田堂垣内遺跡の南方では晩期と推定される河川を確認している。稗田・若槻遺跡に東接し地蔵院川と菩提仙川の間に立地する美濃庄遺跡では、河川から晩期の凸帯文土器が出土している。

弥生時代　縄文土器が出土する河川が分布する一帯には、弥生時代の集落跡も確認できる遺跡が多い。南六條北ミノ遺跡では前期と後期、美濃庄遺跡では前期の遺物が出土する河川や溝がある。八条北遺跡では前期から中期までの方形周溝墓が調査された。造営の盛期は中期で、前期まで遡る事例は

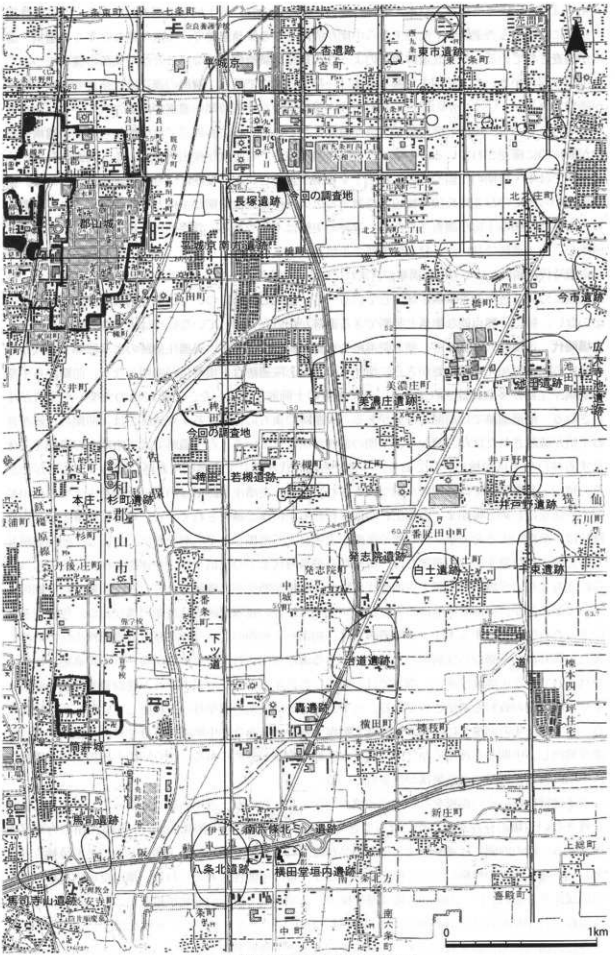


図3．調査地と周辺の主な遺跡（1/25000）

大和では少ないようで注目される。遺跡の周辺では中期の井戸や土坑も確認されている。北方の佐保川左岸に位置する杏遺跡は、前期末から中期が盛期となる集落遺跡で、土坑や溝など多くの遺構・遺物が調査されている。八条北遺跡周辺のような大規模な調査例が少ないことから集落の様相については不明な部分が多いが、前期まで遡る遺跡は一帯では希少である。遺跡の周辺には奈良時代に平城京が造営されるが、いくつかの地点で奈良時代の遺構下から当該時期の遺構が確認されている。東市遺跡もそのひとつで、後期の壺棺墓や土坑が確認されている。他にも周辺では中期から後期の遺構や遺物が断片的に確認されている。中期には稗田・若槻遺跡でも土坑が検出されている。高瀬川に近い治道遺跡では中・後期の土器や木包丁が出土する溝が調査された。後期になると調査事例が増える。盆地東縁から西にのびる低丘陵の縁辺に位置する広大寺池遺跡は後期が主体となる遺跡とされ、末期から古墳時代初頭の土坑が調査されたが、遺跡の実態は不明である。菩提仙川一帯では、井戸野遺跡で流路が、白土遺跡で井戸が、発志院遺跡で土坑が検出されている。また、稗田・若槻遺跡では末期から古墳時代初頭にかけて方形周溝墓が営まれている。以上のように、広範にわたり資料が蓄積され、特に墓域について近年調査事例が増加している一方、集落の実態については部分的にしか明らかになっていない。特に、拠点的な集落と判断できる遺跡が明らかとなっていない点は大きな課題となろう。

古墳時代　古墳時代になると、発志院遺跡や治道遺跡、白土遺跡、美濃庄遺跡のように弥生時代から存続する集落に加えて遺跡数がさらに増加する。発志院遺跡は古墳時代が盛期となり、前期から中期の遺構や土器が多数確認されている。特に多量の土師器が出土した一辺約12mの大型方形土坑が注目される。治道遺跡では前期の井戸がある。両遺跡の東方に位置する千東遺跡では、前期の土器を含む土坑が確認されたほか、溝からは中期の遺物が出土している。白土遺跡では、中期から後期を主体とする井戸や土坑が検出されており、一帯で古墳時代を通じて土地利用が盛んであったことがわかる。稗田・若槻遺跡では後期の水田が調査されている。美濃庄遺跡では前期の土器を出土する河川や竪穴住居をはじめ、後期までの幅広い時期にわたる土坑群が調査されている。東方に位置する池田遺跡では、前期の土器を多量に含む溝や後期を主体とする密集した土坑群を検出している。池田遺跡北方の丘陵上に位置する今市遺跡では、後期から飛鳥時代までの土坑や掘立柱建物を検出している。さらに北方でも、平城京の下層で古墳時代の集落の痕跡が断片的に確認されている。前期から中期の土坑などがあるが、集落の実態は不明である。佐保川に近い長塚遺跡では後期の溝がある。佐保川を南に下った右岸に立地する本庄・杉町遺跡では、初頭から前期の土坑や方形竪穴遺構を検出している。また、筒井城の下層からは前期の土器を出土する溝が検出され、後年城郭が築かれる微高地上に集落が営まれていた可能性が高い。南方では、前記した近年の都山ジャンクション建設事業関連の調査により当該時期の資料も蓄積されている。八条北遺跡では後期の溝や井戸を検出している。西に隣接する一帯でも近年の同事業に関連する調査で製塩土器や臼玉を含む中期の土坑群や井戸、後期の井戸や溝を検出し、中期から後期にかけての盛んな活動の痕跡が認められる。さらに西方の馬司寺山遺跡では中期に竪穴住居からなる集落が営まれている。

対象地域には一定の規模をもつ大型古墳が存在していないが、近年の調査によって、現地表に痕跡を残さない古墳の存在が明らかになってきている。南六條北ミノ遺跡では、一辺約20mの方形区画溝がある。溝の四隅には鋤や鍬などの木製品が置かれ、前期と思われる土器とともに舟形埴輪片が出土している。遺構の性格については議論もあるが、墓の可能性も考えられる。横田堂垣内遺跡では中期に属する一辺約13～20mの方墳4基を検出し、家・鳥・蓋形の形象埴輪が出土している。馬司寺山遺跡では中期に属する径約10mの円墳2基を検出している。どちらも埴輪は出土していないが、一方は周溝内に須恵器をおさめ、一方は後期に周溝内に甕棺墓をつくっている。他の遺構からも甲冑

形埴輪が出土し、周辺に他にも古墳が築造されていることが想定される。北方では杏遺跡で後期の方墳3基が確認されている。規模が明らかなものは一辺約16mで、埴輪がない。長塚遺跡では方墳の周溝隅にあたる部分が調査され、円筒埴輪や後期の須恵器が出土している。他にも本庄・杉町遺跡や美濃庄遺跡、今市遺跡でも埴輪が出土しており、墳丘を削平された古墳が分布する可能性がある。規模が明らかな古墳はいずれも20mに満たないものだが、微高地上には小規模な古墳群が広範囲にわたって築造されたのだろう。

飛鳥時代　後述する奈良時代の資料が豊富であることと比べると、その直前期の様相はあまり明らかではない。本節で対象とした地域には奈良盆地を南北に貫通する古代の幹線道路である下ツ道と中ツ道がある。道路の設置年代は諸説あるが、『日本書紀』天武元年7月に「則ち軍を分りて各上中下の道に当てて屯む」とみえ、この時期には既に設置されていたことがわかる。また、同月には「初め将軍吹負、乃楽に向ひて稗田に至りし日に（以下略）」とあるが、この記事が下ツ道の使用を示していることは早くから指摘されており、稗田という地名がみられる古い例であることも合わせて注目される。下ツ道は平城京の朱雀大路や後世の条里地割の基準ともなり、古代における奈良盆地の土地利用を考える上で特に重要な道路である。ただし、道路の規模からすれば、道路自体や関連する遺構が調査された事例は多くない。7世紀代の遺跡としては、筒井城の下層や馬司遺跡での掘立柱建物があるが、それぞれ1棟を検出したのみで詳細は明らかでない。馬司寺山遺跡では飛鳥時代の土器が一定量出土しており、検出された掘立柱建物群のいくつかがこの時期にあたる可能性が考えられている。

奈良時代　8世紀代には、盆地の北端部に平城京が造営され、京内だけでなく京外においても土地利用が盛行する。京の南辺では、前記したように、近年の成果から九条大路以南での条坊施工が明らかとなり、京造営時の実態について再検討を迫られている。これら京南辺については後章で詳述する。九条大路以南の条坊道路施工が想定される範囲をみると、左京域では長塚遺跡、右京域では郡山城の下層で奈良時代の建物や溝が検出されている。しかし、右京域で明瞭な条坊関連遺構が確認されていないなど課題が多い。中ツ道沿いをみると、池田遺跡で包含層が、井戸野遺跡で溝や柱穴が確認されているが、遺構の広がりや道路との関わりは不明である。下ツ道沿いは資料がやや多い。稗田・若槻遺跡では、平城京羅城門より南約1.9kmの位置で下ツ道上を斜方向に交錯する河川に架けられた橋を検出している。橋脚は2時期あり、周辺では祭祀に関わるものを含む奈良時代の遺物が多量に出土し注目される。検出した河川の延長にも河川の痕跡を示す地割が残存しており、奈良時代の人口河川と推定されている。東方の美濃庄遺跡でも、出土遺物や位置からこれに関わると思われる河川を検出している。この付近では本庄・杉町遺跡でも奈良時代の井戸が確認されている。下ツ道に沿って南下した位置をみると、八条北遺跡で掘立柱建物群や堰状の杭を打つ溝、井戸が調査されている。大量の遺物が出土し、土器類だけでなく祭祀遺物、三彩の小壺や陶硯のほか、「額田部連」木簡をはじめ荷札・文書木簡も出土している。瓦塔も多く出土している。東方の横田堂垣内遺跡では径1m、長さ3.1mの一本木を刳り貫いた井戸枠を用いた井戸や掘立柱建物群が確認されている。製塩土器がまとまって出土する土坑があるほか、瓦塔が一定量出土することも注目されよう。また、西方の馬司寺山遺跡では炉跡や猿投産の土器が出土している。一帯の遺跡が奈良時代に盛行する背景には、当時の主要な道路である下ツ道との関連が想定される。現在も残る盆地に施工された条里水田の地割をみると、平城京や下ツ道など奈良時代に盛期のある交通網の痕跡が多く残っており、当該期の土地利用が後世まで強い影響を与えたことがわかる。

平安時代　平安時代になると様相が明らかな遺跡が減少する。稗田・若槻遺跡や発志院遺跡では建物の遺構を、白土遺跡、本庄・杉町遺跡、馬司遺跡、美濃庄遺跡、横田堂垣内遺跡、轟遺跡などでは井

戸を検出しているが、成果が断片的で集落の実態に迫ることができる資料が少ない。郡山城の下層や八条北遺跡など土器が出土するのみの遺跡もあるが、短期間で豊富な考古資料がある奈良時代とは異なり、情報量がやや少ない印象を与える。遺構・遺物量の少なさは平城京廃絶後の一帯の土地利用状況を反映しているのだろうか。

参考文献

岩波書店 1995『日本書紀（五）』
橿考研 1977「稗田遺跡発掘調査概報」『県概報1976年度』
橿考研編 1980『発志院遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第41冊　奈良県教育委員会
橿考研 1981「池田遺跡試掘調査概報」『県概報1979年度（第一分冊）』
橿考研 1981「本庄・杉町遺跡試掘調査報告」『県概報1979年度（第二分冊）』
橿考研 1982「稗田・若槻遺跡発掘調査概報」『県概報1980年度（第二分冊）』
橿考研 1983「池田遺跡発掘調査概報」・「若槻遺跡第２次発掘調査概報」『県概報1981年度（第一分冊）』
橿考研 1983「若槻庄関連第４次発掘調査概報」『県概報1982年度（第二分冊）』
橿考研 1985「白土遺跡発掘調査報告書」『県概報1984年度（第二分冊）』
橿考研 1994「中ツ道（池田遺跡）」『県概報1993年度（第一分冊）』
橿考研 1995「今市城跡隣接地遺跡1994年度発掘調査報告書」『県概報1994年度（第一分冊）』
橿考研 2000「中ツ道・千束遺跡試掘調査報告」『県概報1999年度（第一分冊）』
橿考研 2001「中ツ道・千束遺跡第２次試掘調査報告」『県概報2000年度（第一分冊）』
橿考研 2003「下ツ道・条里遺跡」『県概報2002年（第一分冊）』
橿考研 2004「八条北遺跡・南六條北ミノ遺跡」『県概報2003年（第一分冊）』
橿考研 2005「八条北遺跡」『県概報2004年（第一分冊）』
橿考研 2007「井戸野遺跡」・「京奈和自動車道郡山ジャンクション建設に伴う試掘調査」『県概報2006年（第一分冊）』
橿考研 2009「馬司寺山遺跡第１次調査・馬司遺跡第４次調査」・「馬司寺山遺跡第２次調査」『県概報2008年（第一分冊）』
橿考研 2009「馬司寺山遺跡第２次調査－２」『県概報2008年（第三分冊）』
橿考研 2010「郡山ジャンクション建設にともなう発掘調査」『県概報2009年度（第三分冊）』
橿考研 2011『横田堂垣内遺跡－郡山ジャンクション建設に伴う発掘調査報告書１－』奈良県文化財調査報告書第143集
郡山市教委 1987『長塚遺跡発掘調査概要報告書』郡山市概要８
郡山市教委 1988『美濃庄遺跡四反田地区発掘調査概要報告書』郡山市概要９
郡山市教委 1989『本庄・杉町遺跡発掘調査概要報告書』郡山市概要14
郡山市教委 1990『若槻遺跡カナヤケ地区発掘調査概要報告書』郡山市概要16
郡山市教委 1990『治道遺跡小北地区発掘調査概要報告書』郡山市概要18
郡山市教委 1997『美濃庄遺跡今倉地区発掘調査報告書』郡山市報告第５集
郡山市教委 2001『馬司遺跡第一次発掘調査報告書』郡山市報告第７集
郡山市教委 2004『筒井城第５次発掘調査概要報告』郡山市報告第９集
十文字健・長谷川義明 2009「発掘調査の成果からみた郡山城」『大和郡山城』城郭談話会
奈文研編 1976『平城京左京八条三坊発掘調査概報　東市周辺東北地域の調査』奈良県
奈文研編 1986『平城京左京九条三坊十坪発掘調査報告』奈良県教育委員会
奈良県 1982・1984『土地分類基本調査　桜井（奈良県）』「　同　奈良、大阪東北部、大阪東南部（いずれも奈良県域）』
奈良市教委 1988「平城京左京八条二坊一坪の調査　第134次」『奈良市概報昭和62年度』
奈良市教委 1990「平城京左京九条四坊二・七坪の調査　第181次」『奈良市概報平成元年度』
奈良市教委 1991「平城京左京九条四坊十坪の調査　第201次」『奈良市概報平成２年度』
奈良市教委 1991「平城京左京八条三坊三坪の調査　第202・203・204次」『奈良市概報平成２年度』
奈良市教委 1995「平城京左京九条四坊・九条大路の調査　第300次」『奈良市概報平成６年度』
奈良市教委 1996「平城京左京八条二坊二坪・古道跡の調査　第337次・340次」『奈良市概報平成７年度』
堀井甚一郎 1966「自然的環境」『大和郡山市史』大和郡山市役所
堀井甚一郎 1970「地形」『奈良市史　地理編』奈良市役所
堀井甚一郎 1976「地形」『天理市史　下巻』天理市役所
山川均・佐藤亜聖 2008「平城京・下三橋遺跡の調査成果とその意義」『日本考古学』第25号

頻出する組織名・書名は以下のように略記する。（以降の章においても同様）

奈良県立橿原考古学研究所→橿考研、奈良市教育委員会→奈良市教委、奈良（国立）文化財研究所→奈文研、大和郡山市教育委員会→郡山市教委

『奈良国立文化財研究所学報』・『独立行政法人奈良文化財研究所学報』→『奈文研学報』、『奈良県遺跡調査概報』→『県概報』、『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』→『奈良市概報』、『大和郡山市文化財調査概要』→『郡山市概要』、『大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書』→『郡山市報告』

第Ⅱ章　稗田・若槻遺跡の調査

1．周辺の既往の調査

稗田・若槻遺跡は、前章でも述べたように広い範囲が遺跡として周知されている。遺跡周辺の過去の調査を図４と表１に示した。調査の大部分が1970年代後半から80年代前半にかけての大規模な宅地開発が原因となっていることがわかる。この時期の宅地開発に伴う調査は奈良県立橿原考古学研究所によって４次にわたっておこなわれている。ただし、一部（図４④・⑤）は若槻庄関連遺跡として調査され、調査地は東に接する美濃庄遺跡の範囲に含まれている。①と②は県営稗田団地造成に伴う調査で、弥生時代から奈良時代の遺構を確認している。特に注目される成果が下ツ道と道を横断する河川に架けられた橋、その周辺から出土した祭祀関連遺物で、奈良時代の道路と祭祀の姿が明らかになった。河川は人工とされ、周辺に遺存する地割とあわせ重要な問題を提起した。③は中学校建設に先立つ調査で、平安時代の掘立柱建物を検出している。④と⑤は宅地造成に関わる調査。④は鎌倉時代の溝による区画とその内部の宅地を調査し、当該時期の居宅の様相を示すものとして注目される。⑤は縄文時代の河川や①・②で確認した河川の延長を確認した。これらの調査以降は大規模な開発が減少し、調査の規模や件数も減少傾向となる。⑥は通学路の拡幅で、小規模な調査だが下ツ道東側溝を調査した。⑦は池の堤の調査。現在まで残る池の構築過程を調査している。⑧は配送センター建設に伴う調査で、弥生時代の方形周溝墓や古墳時代の土坑を検出した。⑨は稗田環濠の濠を整備する保

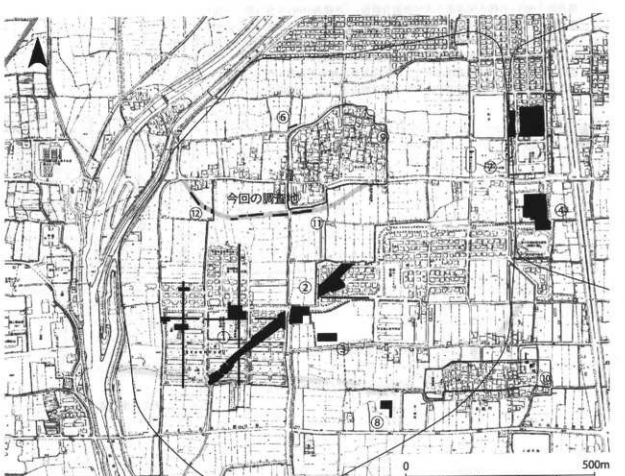


図４．調査地と周辺における既往の調査（1/10000）番号は表１に対応

水池整備事業の事前調査だが、環濠形成に迫るような成果は得られなかった。⑩は若槻環濠の範囲確認調査。環濠の変遷に関わる資料を得ているが、長く使用される濠という遺構の性格上、集落の初現につながる決定的な成果は得られていない。⑪と⑫は今回報告する調査である。図５に示したように、稗田環濠の西辺に沿う南北道路をはさんで東側を1997年度、西側を2007年度に調査した。⑤の調査以後、一定規模の範囲を調査する機会が少なかったことや、事業地内を下ツ道推定地が通ることから、大きな成果を得られることが調査前から期待された。

表１．調査地周辺の既往の調査

番号	期間	面積(㎡)	調査原因	機関	主な成果	文献
1	1976.8～1977.2	13200	県営稗田団地造成	橿考研	弥生、古墳、奈良 奈良時代河川より祭祀遺物	1
2	1980.9～1981.2	6000	宅地造成	橿考研	奈良時代河川、下ツ道、交差点の橋脚 多量の祭祀関連遺物	2
3	1981.5.11～7.15	675	中学校建設	橿考研	掘立柱建物（平安）	3
4	1981.7.20～12.16	5200	宅地造成	橿考研	古墳、奈良、中世、鎌倉時代の屋宅	4
5	1982.9.1～1983.1.14	6400	宅地造成	橿考研	縄文、古墳、奈良	5
6	1983.12.10～12.11	18	通学路拡幅	郡山市	下ツ道東側溝	6
7	1986.5.8～5.31	116	仮称「童の館」建設	郡山市	池堤の調査	7
8	1989.12.6～1990.2.28	850	配送センター建設	郡山市	弥生、古墳、平安	8
9	1992.3.9～3.31	16	特定保水池整備	郡山市	稗田環濠の調査	6
10	1999.8.2～8.24	117	範囲確認	郡山市	若槻環濠の調査	9
11	1998.2.10～3.18	200	市道高田稗田美濃庄線建設	郡山市	下ツ道東側溝 弥生、奈良	本書
12	2007.11.26～2008.2.16	650				

１．橿考研 1977「稗田遺跡発掘調査概報」『県概報1976年度』
２．橿考研 1982「稗田・若槻遺跡発掘調査概報」『県概報1980年度（第二分冊）』
３．橿考研 1983「若槻遺跡第２次発掘調査概報」『県概報1981年度（第一分冊）』
４．橿考研 1983「若槻庄関遺第３次発掘調査概報」『県概報1981年度（第二分冊）』
５．橿考研 1983「若槻庄関遺第４次発掘調査概報」『県概報1982年度（第二分冊）』
６．郡山市教委 1992『稗田環濠　付、下ツ道第２・３次発掘調査報告』郡山市報告第３集
７．郡山市教委 1987『若槻池発掘調査報告書』郡山市概要５
８．郡山市教委 1990『若槻遺跡カナヤケ地区発掘調査概要報告書』郡山市概要16
９．郡山市教委 2000『若槻環濠第１次発掘調査報告書』郡山市概要39

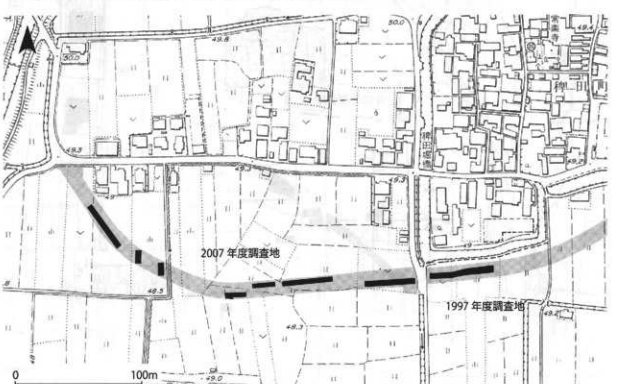


図５．調査区配置図（1/3000）

2．1997年度調査の成果

1997年度調査では、事業計画地約2600㎡に対して、主に下ツ道の状況確認を主目的として200㎡の調査区を設定した。調査区は道路予定地に沿って設けているため、東西方向にやや蛇行した形で設定されている。以下、調査の概要と遺構の報告については調査終了後に作成された終了報告を掲載することで報告に代える。また、遺物については下ツ道東側溝とみられる南北溝からの出土遺物を報告する。

A　調査の概要

調査は道路計画地に東西50m、南北４mのトレンチを設定し、遺構面までを重機で掘削、検出した遺構を人力によって掘削した。

調査の結果、下ツ道東側溝とみられる溝を確認、また、溝の東側で耕作に関連する小溝を、下ツ道路上とみられる部分では、道が廃絶してのちの自然流路を検出した。以下、主要遺構について説明する。

下ツ道東側溝

幅員10.3m、深さ約２mの溝である。埋土は肩部と底部のごく一部に粘土層の堆積がみとめられたが、ほぼ全部が砂・礫・石の流水による堆積であった。埋土中からは少数ながらほぼ完形の土器が出土している。いずれも奈良時代のものである。また、最上層の砂礫層から完形の黒色土器が出土しており、平安時代初期のものであることから、平城京廃都後およそ半世紀のあいだに完全に埋没してしまったようである(1)。

なお東側溝芯の国土座標値はX=-151391.000m、Y=-18552.370mで(2)、下ツ道第２次調査地点(3)間での国土座標に対する振れ角度はN0°59′29″Wであった。

下ツ道路面

東側溝の西側からトレンチ西端までの約８m分が下ツ道の路上である。これまでの調査データから下ツ道の幅員は約20mとされていることから、路面の半分ほどを検出したことになる。路面は保守整備がなされず荒れた状態で、東側溝が完全に埋没後に帯水した時期があったようである。

また、東側溝とは別に下ツ道に沿う溝状の遺構があ

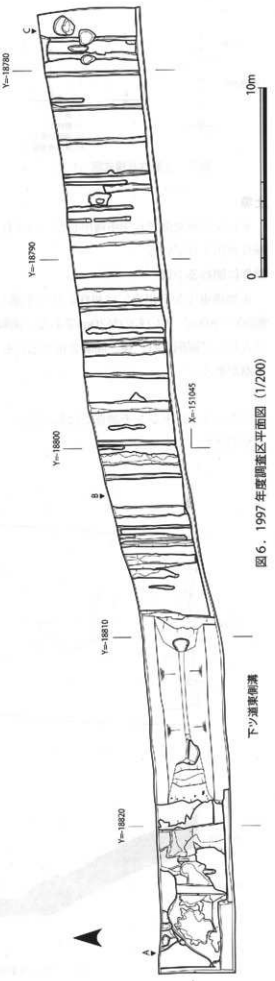


図６．1997年度調査区平面図（1/200）

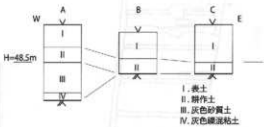


図７．土層柱状模式図（1/20）

る。溝の北半分は東側溝の最終埋没時に流し潰されたようで南半が遺存していた。埋土は砂礫層を主体とするもので、東側溝が埋没する、ある段階のものに対応するとみられることから、東側溝と共存するか時期が下るものと推定される[4]。遺構の状況から側溝と考えるのが妥当であるが、同様の遺構が下ツ道のほかの調査ではみとめられていない。

土壙

トレンチ東端部で６箇所検出した。いずれも浅いもので規格性もなく性格はよくわからない。瓦器椀片が出土している。

耕作に関わる小溝

東側溝東岸から以東には耕作に伴う小溝が35条検出された。溝の幅には広狭があり、広いものは幅50～80㎝、狭いものが20㎝である。溝幅の広さには時期差があるようで、狭いものが1.6m間隔で先行して掘削され、後、間隔２ｍで広いものが掘削されたとみられる。出土遺物は近世の陶磁器、土器がある。

以上のようにトレンチ調査ではあったが、下ツ道東側溝の幅員、深度、座標値等のデータを得ることができた。

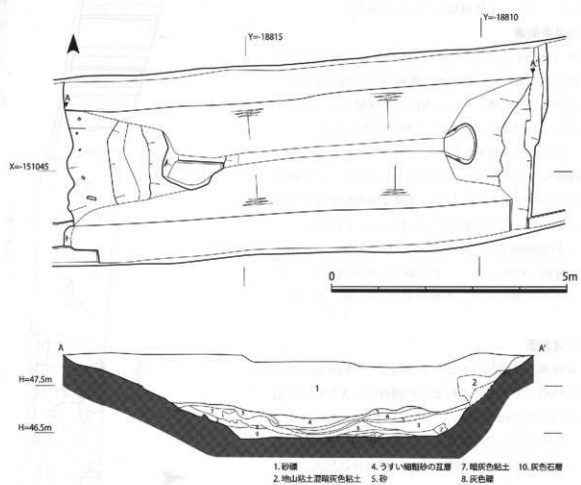


図８．下ツ道東側溝平面図・土層図（1/80）

B　遺物

遺物は整理用コンテナで６箱分が出土した。大半が下ツ道東側溝から出土した土器類で、その他は後世の素掘り溝などから少量の土器や陶磁器片が出土している。土器類以外のものには包含層から出土した銅銭が１点ある。

下ツ道東側溝出土遺物（図９）

下ツ道東側溝からは調査面積が小規模だったにも関わらず、コンテナ５箱分の土器類が出土した。内容は土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器、小型模造品、土馬である。大部分が破片で、接合が可能な個体は少ない。遺物の内容について、断面土層図と遺物ラベルを手がかりに報告する。ラベルによると、層位別に遺物を取り上げていることがわかる。そのうち上下関係を推測できる層名にはＡ．最上層砂礫層、Ｂ．第２層灰白細砂、Ｃ．第３層砂礫層、Ｄ．最下層青灰色粘土の４つがあるが、これらラベルの内容と土層図（図８）中の注記内容との整合関係の記録が存在していない。また、最も出土量が多い層のラベルには単に「砂礫」とある。Ａ．最上層かＣ．第３層かの判別が困難だが、日付からＣ．第３層に属するものである可能性が高い。しかし、Ａ～Ｄの４つの層と土層図との整合が明らかでないため、Ａ＝図８－１層であることを除くと他は不明である。各層の間での接合関係は認められなかったものの、層の性格が明らかでないこともあり、層序間の遺物の関連性について踏み込んだ判断をすることができない。そこで報告にあたっては、側溝の埋没年代の一端と機能時の様相をある程度示す資料として一括して提示する。図化した遺物の大部分は「第３層砂礫層」および「砂礫」からの出土である。これらと異なる層から出土したものについては文中で述べる。土器の器種などは平城宮出土土器の報告に準じる[5]。

１～13は土師器である。**１**は杯Ａ。外面は底部をヘラケズリし、口縁部を粗くミガキ。内面には放射状暗文を施す。焼成良好。**２**は最上層砂礫層出土の杯Ｃ。口縁部がやや外反し端部を丸くおさめる。底部外面は無調整。口縁部をヨコナデ。焼成良好。**３**と**４**は皿Ａ。３は口縁端部を丸くおさめる。全面が磨耗し調整は不明。４は口縁部が内湾しながら立ち上がり、端部を屈曲させる。器面の調整は磨耗により不明。**５**は椀。口縁部が内湾しながら立ち上がり、端部を丸くおさめる。焼成良好。**６**は高杯で、脚部と杯部の接合部分が残存する。焼成不良で全面が磨耗し調整が不明。**７**と**８**は小型の壺。７は全体が磨耗し内外面の調整が不明瞭。８は完形。休部には指頭痕が明瞭に残り、粘土紐の接合痕がはっきりと観察できる。焼成良好。**９**と**10**は壺Ｂ。９は口縁部付近のみが残存する。口縁部をヨコナデし他は内外面ともにナデ。粘土紐の接合痕が残る。10は約半分が残存する。胴部の２箇所に小ぶりの把手を付す。胴部は内面上半をハケ調整する他はナデ。底部には成形台の痕跡が残る。墨書人面土器用の土器と思われるが、残存部分に墨痕はない。**11**と**12**は壺。やや長胴気味の球形の胴部に短い口縁部が外反する。内外面に粘土紐の接合痕を残す。どちらも焼成良好。**13**は甕で口縁部付近が残存する。口縁部内面と胴部外面の一部にハケが残存する他はナデ。口縁端部は内側に屈曲させる。

14～23は須恵器である。**14**、**16**、**17**は杯Ｂ。14は唯一全形を復元することができる。口縁部はまっすぐ外方にのばし、底部を回転ヘラ切り。焼成はやや不良。16は壁面精査時の出土。口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。17は底部のみ残存。ややぼってりした高台を付す。**15**は杯の口縁部で最上層砂礫層出土。外反しながら口縁部が立ち上がる。15～17は焼成が堅緻。**18**は皿Ｃ。口縁端部をやや平坦とする。底部外面は回転ヘラ切り。19～23は壺である。**19**は完形の壺Ｇ。外面は体部下方を回転ヘラケズリ、肩部を回転を用いてヘラケズリし、頸部を接合した後に回転ナデする。頸部は回転ナデ。底部には回転を用いた糸切り痕が明瞭に残る。調査区の壁面が崩落した際に出土した

ようで層位は不明。**20**は胴部が残存する壺M。胴部外面の大部分に回転ヘラケズリ。肩部に降灰がみられる。底部には回転糸切り痕が明瞭。**21**はやや大型の壺の口頸部。外反しながら立ち上がり、中央に２条の沈線を施す。端部外面には小さな窪みが一周する。**22**と**23**は高台を付す壺の底部。22は底部を回転糸切り後、外方にふんばる高台を付す。内面の中央に降灰がみられる。23は底部を回転ヘラケズリし、やや背の高い高台を付す。壺類はすべて焼成堅緻。

24は黒色土器の椀。内面のみを黒色処理するA類である。外面は底部をヘラケズリ、口縁部上半を粗いヘラミガキ。内面は口縁部全面を密にヘラミガキする。見込みは密にミガキを施した後、口縁部との境付近に連結輪状の暗文を施す。口縁部にも部分的にミガキ後の暗文がみられるが、文様の意匠は不規則である。最上層砂礫層より出土。

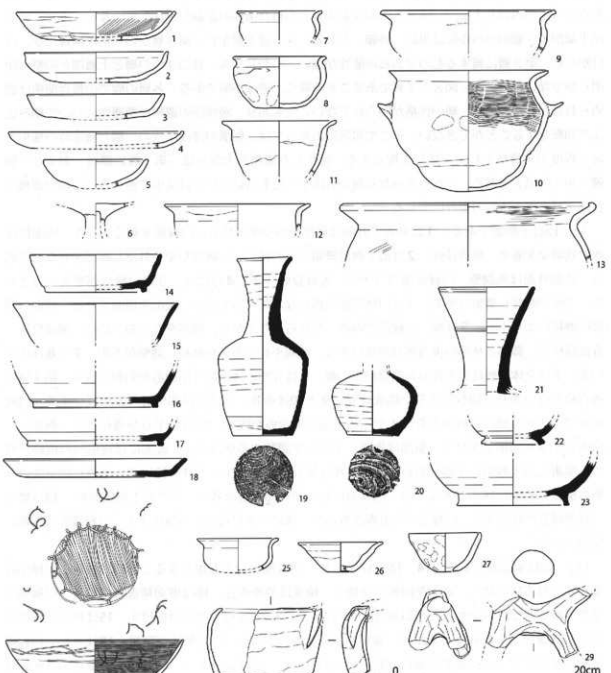


図９．下ツ道東側溝出土遺物（1/4）

25～28は小型模造品である。**25**は甕。内外面が磨耗する。**26**と**27**は甑である。26は小さな平底からまっすぐ外方にのびる体部をもつ。粘土紐の接合痕を明瞭に残す。27はゆるやかに内湾する体部で底部を穿孔する。外面には指頭痕を明瞭に残す。**28**は竈である。基部と炊口の端部と廂の一部が残存する。基部は端部を平滑に仕上げる。廂は貼り付け。外面に粘土紐の接合痕を明瞭に残す。

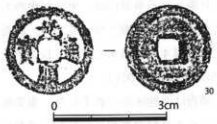


図10. 包含層出土銭貨（1/1）

29は土馬である。胴部を残すが、焼成不良で磨耗により調整などは不明。最上層砂礫層から出土。

これらの土器類は平城宮土器Ⅲ～Ⅶに併行するものが混在していると考えられる。特に注目される土器は最上層出土の黒色土器椀（24）で、平城宮土器Ⅶに属すると考えられる。同時期の遺物がまとまった量で出土している状況ではないが、より新しい遺物が共伴することもなく、側溝埋没年代の一端を示していると判断できる。

銅銭（図10）

遺物包含層から銅銭が1点出土した。**30**は光順通寶。鋳造は後黎の光順年間（1460～1479年）[6]。

3．2007年度調査の成果

A　調査の概要と経過

2007年度調査は、同年11月に大和郡山市（主管は道路河川課）から発掘通知が提出された、事業地西半部分約3960㎡を対象としておこなった調査である。調査は2007年11月26日から翌年２月16日（実働41日）まで、作業員のべ184人、バックホー（0.45）のべ34台、補助員のべ26人を要しておこなった。

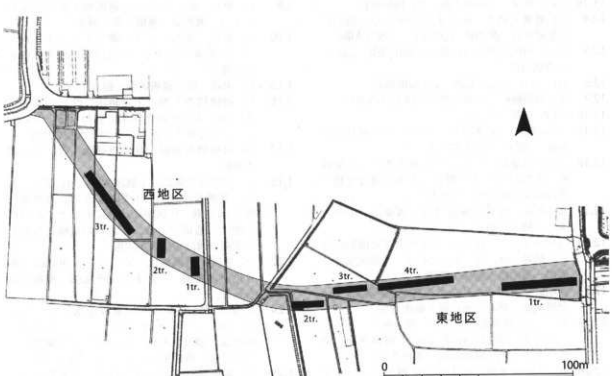


図11. 2007年度調査区配置図（1/2000）

対象となる事業地は、東半が東西方向のほぼ直線の路線、西半が南東から北西に向かってゆるやかにカーブする路線となっている。調査にあたり、形状の異なる路線部分をそれぞれ東地区、西地区として幅4mを基本とするトレンチを設定した。設定したトレンチは7箇所で、調査面積の合計は約650㎡である（図11）。

調査は西地区から着手した。事業地内西半の水田には南北方向の塩ビ製暗渠排水管が多数設けられていることが調査前からわかっており、当初はこの暗渠を避けながら調査区を設定するよう担当課より要望があった。そこで、予定路線に対して直行する方向の短いトレンチを多数設定することとした。しかし、実際に調査を開始すると、暗渠の位置が事前に用意された図面上の位置とずれていることや、想定より簡易な構造で復旧が容易であることがわかり、3tr.以降は路線に対して並行方向の長いトレンチを設定した。西地区の調査が完了した12月21日にラジコンヘリによる1回目の空中写真撮影をおこなった。その後西地区を埋め戻し、東地区へ移動した。東地区の調査は年が明けた2008年から着手した。両地区ともに湧水の多い調査となり作業は難航したが、特に東地区では夜間に排水ポンプ用の電源がおちるトラブルが続いたこともあり、労を要した。順次トレンチを設定し、掘削作業が完了した2月7日に2回目の空中写真撮影をおこなった。図化作業は事業地内に移設した基準点を用いて手測でおこなった。西地区と同様に暗渠の復旧をおこないながら埋め戻しを進め、2月16日に全作業を終了した。調査経過の詳細は以下の調査日誌に示す。

調査日誌

11.26 バックホー、ユニットハウス、調査機材等搬入。西地区から調査開始。1tr.設定、掘削開始。堆積層は粘土、砂からなる。地山直上の包含層には瓦器。

11.27 1tr.遺構面精査。顕著な遺構、遺物はなし。

11.28 1tr.全景写真撮影。2tr.設定、掘削開始。

11.29 1tr.土層図、平面図実測。2tr.掘削継続。

12.4 2tr.遺構面精査。前日までの雨からの復旧に時間要する。溝完掘。瓦器出土。全景写真撮影。

12.5 2tr.土層図実測。3tr.設定、掘削開始。2tr.より遺構面深い。

12.6 1tr.と2tr.平面図実測。3tr.掘削継続。

12.7 3tr.掘削継続。中央に溝状の落ち込みあり。

12.10～14 現場一時中断。

12.17 現場再開。3tr.溝掘削。湧水などで掘り下げ難航。底から弥生土器出土。

12.18 3tr.掘削継続。トレンチ内湧水激しく作業難航。西端には大きな撹乱。中央の溝は性格や埋没時期が明らかにできない。

12.19 3tr.継続。西端の撹乱付近で溝検出。中央の溝と堆積土が似ている。同一の溝か。

12.20 西地区すべてのトレンチを空中写真撮影に備えて精掃。3tr.溝一部たちわり。土層図実測。現場一帯の排水関係の整理。

12.21 西地区ラジコンヘリによる空中写真撮影。3tr.全景撮影。週末の雨に備え厳重養生。

12.25 1tr.と2tr.暗渠復旧しながら埋め戻し。埋め戻し終了後、周辺の掃除。3tr.土層図実測。溝部分週末の雨で壁面崩落。遺物洗浄。

12.26 3tr.平面図実測。年末年始に備え周辺の安全柵など整備。東地区へ水準点移動。

12.27 3tr.埋め戻し。埋め戻し後、周辺の掃除など。水田アゼの復旧。年末に備え周辺厳重チェック。

1.7 ユニットハウスなど移動。バックホー東地区へ回送。東地区安全柵設置。トレンチ設定地一帯の表土めくり。

1.8 東地区1tr.設定掘削。東端で幅約2mの南北溝を検出するが時期不明。湧水に対し側溝掘削。

1.9 1tr.継続。西に向かって遺構検出面ゆるやかに下る。遺物量、遺構次第に減少。

1.10 1tr.継続。湧水により一晩でトレンチ水没。さらに側溝を設ける。翌日以降の雨天に備え周辺養生。

1.15 1tr.東端一帯の遺構精査と掘り下げ。

1.16 1tr.遺構精査と掘り下げ継続。昨日の雨と午後の雨による水抜き作業に追われる。次のトレンチ設定地も水没したため、水抜き作業。

1.17 1tr.遺構精査継続。水準点移動。雪により調査難航。

1.18 1tr.全景写真撮影。土層図実測。2tr.設定、掘削。遺構面は1tr.より浅いようだ。南西端に幅10cmの溝。住居跡か。他にもいくつか同様の埋土の遺構がある。これらの遺構より新しい素掘り溝は検出次第完掘。

1.22 2tr.掘削、遺構検出。明らかに中世以降の掘り込みは完掘。一部トレンチ拡張。東端が落ち込む。

1.24 昨夜の間に調査区内の電源が落ちていたため、両トレンチ水没。2tr.さらに一部拡張。南西端の溝は性格明らかにならず。東端落ち込み完掘。遺構掘り下げ。1tr.土層図実測。

1.25 2tr.遺構掘り下げ。特に目立った遺物なし。土層図実測。3tr.設定、掘削。中央で南北方向の溝検出。遺構検出面直上の層には瓦器。調査区外の排水系整備。

1.28 2tr. 土層図実測。3tr. 掘削継続。遺構精査、完掘。土層図実測。次のトレンチ一帯表土掘削。

1.30 前日までの雨水排水により作業やや遅れる。2tr. 遺構図実測。3tr. 遺構完掘。4tr. 設定、掘削。西端に南北溝。遺構面は南北溝を境に一度落ち込んだ後、東に向かってゆるやかに高くなる。

1.31 2tr. 遺構図実測。4tr. 掘削継続。遺構面を誤認していたことが明らかとなり大部分を再掘削する。中央に溝検出。

2.1 4tr. 掘削継続。中央の溝完掘。東端で落ち込み検出、溝か。古代の土器含む。

2.4 4tr. 継続。今朝までの雨でトレンチ東端付近の壁面崩落。東端に溝。雨やみきらず調査難航。

2.5 2～4tr. 全面精掃。4tr. 土層図実測。1tr. 壁一部崩落、復旧作業に追われる。

2.6 1tr. と4tr. 精掃。4tr. 土層図実測。空中写真撮影に備えトレンチ周辺も掃除。

2.7 東地区全景空中写真撮影。2～4tr. 全景および部分写真撮影。調査機材一部搬出。

2.8 1tr.・4tr. 平面図実測。

2.11 2～4tr. 平面図実測。先日の大雪で4tr. 壁面一部崩落。

2.13 2tr. 平面図実測。2～4tr. 埋め戻し開始。

2.14 東地区埋め戻し。一部並行して暗渠復旧。調査道具類一部搬出。

2.15 埋め戻し継続。安全柵解体。敷地の境界に縄張り。主管課、埋め戻し状況立会い。

2.16 埋め戻し完了。バックホー、機材など搬出。現地調査すべて終了する。

B　層序と遺構

今回の調査では7箇所にトレンチを設定した。層序と遺構の内容についてトレンチごとに報告する。

西地区1tr.（図12）　西地区の東端に設定した長さ10mの南北方向トレンチ。表土下に粗砂や細砂からなる砂層が厚さ約20cmある（Ⅱ層）。以下灰色～灰白色の粘土からなる土師器や瓦器小片を含む遺物包含層が約40cm堆積し、標高約47.6m（地表下約0.8m）で青灰色シルトの基盤層となる。遺構は基盤層上面で幅35cm、残存する深さ15cmの素掘り溝を1条検出したのみである。

西地区2tr.（図13）　1tr. の14m西に設定した長さ10mの南北方向トレンチである。表土下には1tr. と同様の砂層がみられる（Ⅱ層）。砂層直下で検出した灰色粘土層（Ⅲ層）は上面に畦畔状の高まりがみられる。かつての水田面であったと考えられるが年代を示す手がかりは得られなかった。Ⅳ層は1tr. のⅢ層に対応する遺物包含層。直下の標高約47.5m（地表下約0.85m）で青灰色シルトの基盤層となる。基盤層上面で幅約4.5mに復元できる溝を検出した（溝1）。残存する深さは約0.4mで南西方向に向かって底面がゆるやかに下る。須恵器や土師器の小片があるが時期は明確ではない。

西地区3tr.（図14）　路線が大きくカーブする位置に南東から北西方向に設定したトレンチで長さは40m。表土以下の堆積は1・2tr. とほぼ同様で、砂層（Ⅱ層）、旧水田面と思われる灰色～青灰色粘土層（Ⅲ層）、瓦器や土師器を含む青灰色粘土を主体とする遺物包含層（Ⅳ層）である。標高47.3～47.5mで青灰色シルトおよび粘土からなる基盤層に達する。基盤層の上面で土坑や溝を検出し

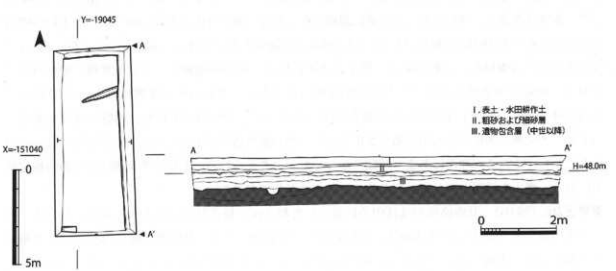


図12. 西地区 1tr. 平面図（1/200）・東壁面土層図（1/100）

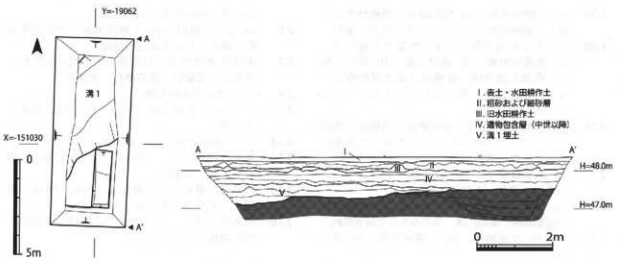


図 13. 西地区 2tr. 平面図（1/200）・東壁面土層図（1/100）

た。土坑1は平面形が不整形で深さは約20cm。瓦器小片を含む青黒色粘土を埋土とする。溝は2条を検出した。溝1は幅約5m、残存する深さ1.2mの南北方向の溝である。溝2は幅約5.5m、残存する深さ1.4mの東西方向の溝である。どちらも断面形は逆台形状で、底の幅は2.5～3mとなる。両者は埋土の状況が酷似すること、それぞれを調査区外に延長するとトレンチの北東で交錯することから、同一の溝と考えることができる。底面の直上に自然木を多く含む灰色砂質土が20cmほど堆積し、その上には緑黒色粘土が厚く堆積する。この粘土層には灰白色粘土がブロック状に混入しており、その粗密で細分ができる。堆積状況から、ある時期からほとんど水流がなく湿地状であったことが推測される。遺物は、底直上から弥生土器1点とサヌカイト剥片が出土したが、他に遺物がなく、ただちに溝の時期を断定できない。溝の性格も不明である。

東地区1tr.（図15） 事業地の東端に設定した長さ40mの東西方向のトレンチである。表土・水田耕作土（Ⅰ層）の直下には均質で鉄分を多く含む青灰色シルト層が西半のみに堆積する（Ⅱ層）。これらの下位には灰～青灰色の粘土が堆積する（Ⅲ層）。古墳時代から奈良時代の須恵器や土師器を少量含むが形成時期は明らかでない。Ⅲ層下で粘性の強い青灰色シルトの基盤層となる。基盤層はトレンチの東端では標高48.3mと高く、この部分ではⅠ層の下で基盤層となる。Ⅲ層の堆積は後述する溝1以西に認められ、標高は47.9～48.0mと西に向かって下る。トレンチの東端は事業地東に隣接する水路を設置する際に大きく撹乱を受けている。遺構はトレンチの東半で溝、土坑、落ち込みを検出した。密度は希薄で、西に向かって次第に遺構がなくなる。溝1は南北方向の溝である。東肩が標高48.3mで、西肩が48.0mで検出される。肩の形状は直線的だがやや歪で、幅は2.0～2.7mである。残存する深さは東肩からで45cmある。埋土は青灰色粘土が約15cm堆積し、上位をⅢ層に覆われる。少量の土師器や須恵器片が出土したが時期は明らかでない。溝心の国土座標値はX=-151051mでY=-18842.45m。土坑1は北端のみが調査区内にある。深さは約10cmでⅢ層と同質の埋土である。当トレンチで唯一図化できる須恵器片が出土した。他の落ち込みや土坑も同様の土が埋土となっていることから、これらの埋没にあまり時間差がないものと考えられる。トレンチ東端は下ツ道の推定位置に近く、溝1も道路と同じ方向であることから注意しておきたい。

東地区2tr.（図16） 計画路線のほぼ中心に設定した幅3m、長さ16.5mの東西方向のトレンチ。表土・水田耕作土を除去した標高48.1mで明褐色土の基盤層となる。基盤層上面で溝や土坑、素掘り溝を検出した。素掘り溝は南北方向で幅は約30cmと約1mの2種がある。いずれも埋土は灰白色砂質土で農耕作に関連するものと思われる。溝1は幅約10～30cm、残存する深さは5～10cm。ゆる

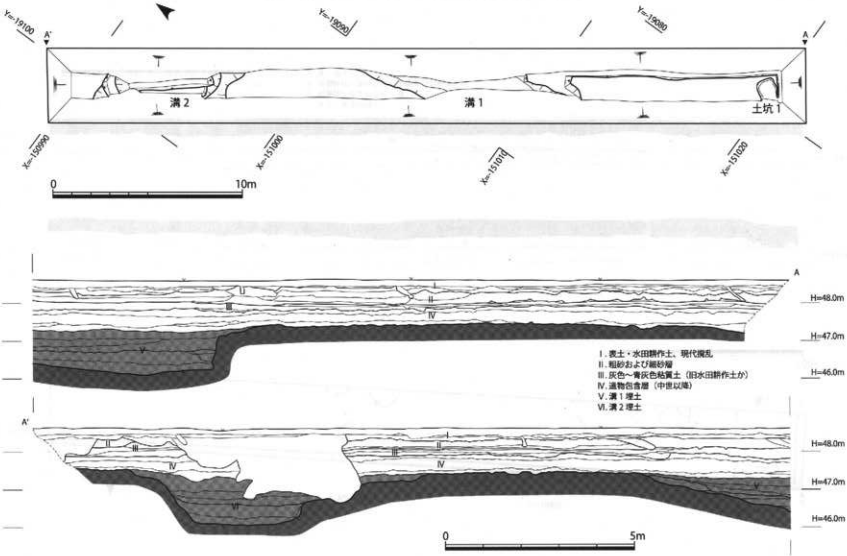


図 14. 西地区 3tr. 平面図（1/200）・北東壁面土層図（1/100）

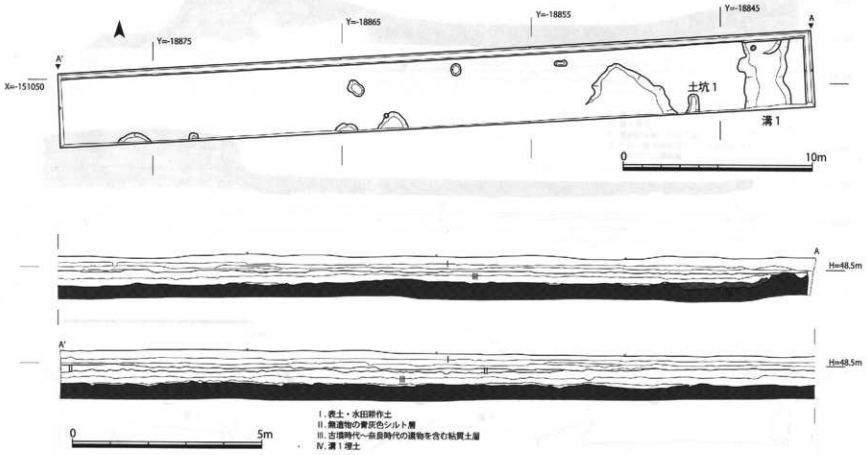


図 15. 東地区 1tr. 平面図（1/200）・北壁面土層図（1/100）

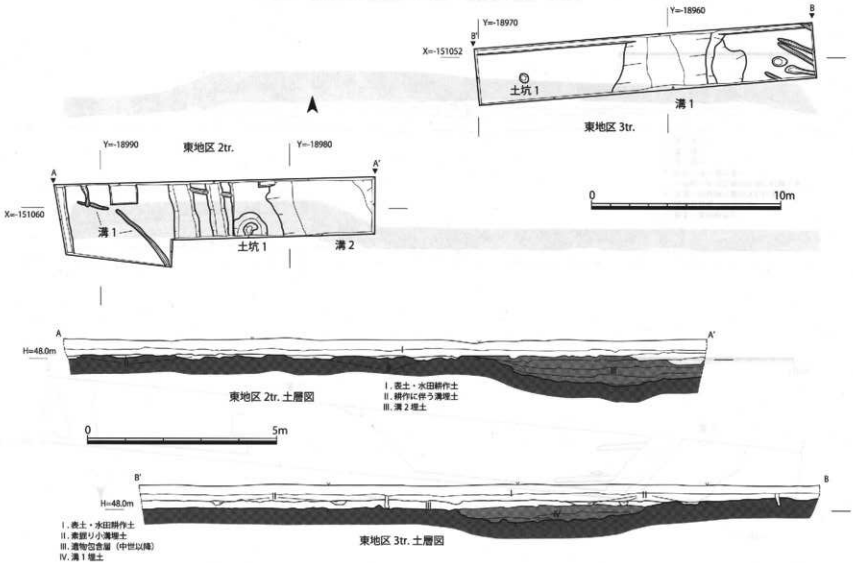


図 16. 東地区 2・3tr. 平面図（1/200）・北壁面土層図（1/100）

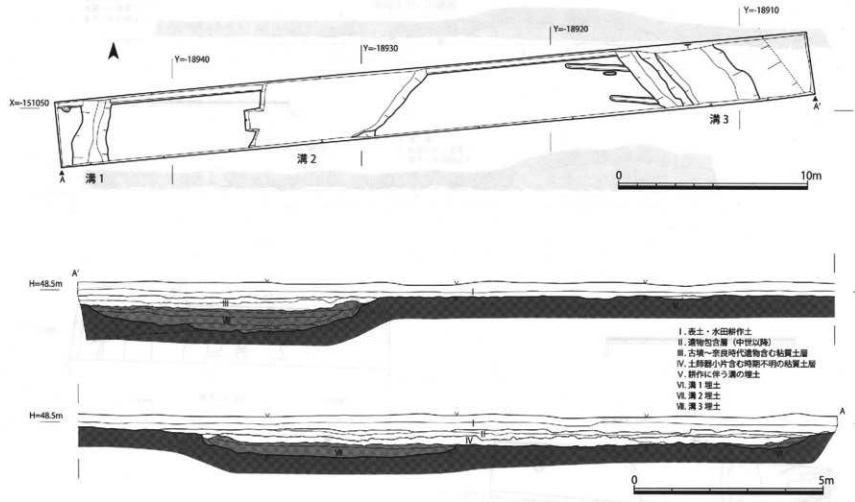


図 17. 東地区 4tr. 平面図（1/200）・南壁面土層図（1/100）

やかに弧を描くように掘削されている。埋土は土師器片を含む暗褐色土である。竪穴住居の壁際溝の可能性が考えられたためトレンチを拡張して調査したが、平面形や周辺の遺構の状況から住居ではないと判断した。溝２は南北方向の溝で、検出面からの深さは約0.8mである。東肩がトレンチ外となり、上幅は６m以上、底の幅は3.5m。埋土はオリーブ灰色～灰色の粘土が主体となり、流水の痕跡を示す堆積はない。古墳時代後期と思われる土器片が出土した。土坑1は平面形が直径約２mの円形で、残存する深さは0.5m。暗褐色～黒褐色土を埋土とし、古墳時代の土師器の破片をやや多く含むが、残存状況が悪く詳細を明らかにできない。炭化物も多く含む。

東地区３tr.（図16） 2tr.の７m北東に設定した幅３m、長さ18mの東西方向のトレンチ。表土・水田耕作土（Ⅰ層）下に瓦器の小片を含む灰オリーブ色粘質土の遺物包含層がひろがる（Ⅲ層）。Ⅲ層の上面から幅30cm前後の素掘り溝が掘りこまれる。トレンチ西半ではⅢ層を、東半ではⅠ層を除去すると黄褐色土の基盤層となる。上面の標高は西端で48.0m、東端で48.3m。遺構は基盤層上面で素掘り溝、土坑、溝を検出した。素掘り溝は褐灰色の砂質土を埋土とし、特にトレンチ東端に多く、北西から南東の方向のものを主体とする。耕作に関連するものだろう。土坑１は平面円形で、直径約40cm。深さは７cmで浅い窪み状である。骨片と思われる小片が含まれていたが詳細は明らかでない。溝１は幅５～6.5m、深さは約40 ～ 50cmで、埋土は青灰色粘土を主体とする。一定の流水を示す堆積はない。土師器の小片が少量含まれるが時期は不明である。

東地区4tr.（図17） 3tr.の５m東に設定した幅3.5m、長さ40mの東西方向のトレンチ。溝２を境に東半では表土・水田耕作土（Ⅰ層）を除去した標高48.4mで黄褐色粘質土の基盤層となる。西半ではⅠ層の直下に瓦器の小片が出土するオリーブ灰色～灰白色の粘質土が堆積する（Ⅱ層）。この層が堆積する範囲は基盤層の標高が47.9mと低いがトレンチ西端で再び標高48.3mまで高くなる。溝３の周辺には灰白色のシルトと粘土層が堆積する（Ⅲ層）。古墳時代から奈良時代の土器片を少量含む。溝２以西にはⅡ層直下に灰黄褐色粘質土および明褐灰色粘質土が堆積する（Ⅳ層）。土師器小片を少量含むが形成の時期は不明。遺構は基盤層の上面で検出した。検出した遺構には耕作に伴う素掘り溝とその他の溝がある。素掘り溝は幅約30cmでトレンチ東半に多く東西方向を主体とする。溝１は南でやや西に傾く方位のほぼ直線的な溝で、上面の幅は1.5m～２m、底部の幅は0.2 ～ 0.6mである。この溝を境に西で基盤層の標高が高くなる。深さは西肩からで約30cm。埋土は青灰色粘土で古墳時代と思われる土器の小片を少量含む。溝２は溝１と同様の方向にのびる。上幅は一定でなく北側で約7.5m、南側で約５mとなる。断面形は逆台形状で底の幅は４～６mとなる。この溝の東肩から基盤層が高くなり、東肩からの深さは約50cmある。明オリーブ灰色～褐灰色粘土を埋土とし、時期不明の土師器小片を少量含む。溝３は北西から南東方向の直線的な溝である。誤って東肩を大きく掘り下げてしまったが、上幅は約6.3m、底の幅は約2.7m。残存する深さは約55cmである。底付近には自然木や古墳時代から飛鳥時代の土器を含む黒色～褐灰色の粘土が約20cm堆積し、以上は褐灰色のシルト・粘質土が堆積する。上位の粘質土には古代と思われる平瓦の小片が３点含まれる。

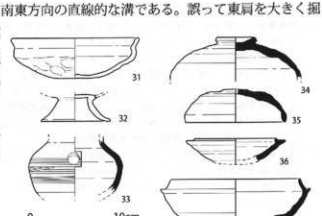


図 18. 東地区 4tr. 溝３出土土器（1/4）

C 遺物

出土遺物の総量は、調査面積からすると少量

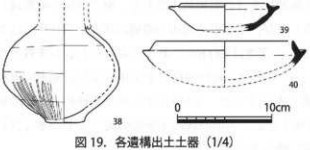


図19. 各遺構出土土器（1/4）

で、整理用コンテナで3箱分である。大部分が土器類の微細な破片で、図化できる資料はさらに限られる。土器類には弥生土器、土師器、須恵器、瓦器がある。古代と思われる平瓦片も出土しているが、破片が小さく量が少ないことから詳細は不明である。出土量が比較的多い遺構に東4tr. 溝3があるが、他の溝や土坑からはほとんど遺物が出土していない。以下、遺構から出土したもので図化できた土器類について報告する。

東地区4tr. 溝3（図18） 土師器、須恵器、瓦が出土した。土器類の総量はコンテナ1箱もない。比較的形状を復元できる7点を図化した。31と32は土師器である。**31**は杯である。短く外反する口縁部をもつ。底部の外面は特に調整をせず指頭圧痕を明瞭に残すが、他は内外面の口縁部をヨコナデ、底部内面をナデで丁寧に仕上げる。胎土は精良。底部から口縁部にかけ黒斑がある。**32**は短く外方に大きく広がる高杯の脚部。焼成不良で内外面の器面調整の観察ができない。33～37は須恵器。**33**は体部のみ残存する壺。体部中央をカキメ調整し、中央よりやや上に円孔を穿つ。底部は回転ヘラケズリ。**34**は高杯の蓋と思われる。笠状の形態で頂部に中央がくぼむつまみを付す。**35**は全形を復元できる杯蓋。外面頂部を回転ヘラ切り、他は回転ナデ。**36**と**37**は杯身。36は立ち上がりが短い口縁部のみが残存する。37は身が深く、口縁端部の立ち上がりがやや大きい。底部外面は回転ヘラケズリ。須恵器はすべて焼成堅緻。瓦は図化していないが、縄タタキを残す平瓦の小片で、3点が最上層から出土した。

これらの土器は33、34、37が古墳時代後期[7]、他が7世紀前半[8]のものと判断できる。層によって年代を分けられる様相ではなく、古墳時代のものは周辺からの混入と考えられる。

その他の遺構（図19） **38**は弥生土器長頸壺の胴部。外面全体に縦方向のミガキを施すが、磨耗により単位が不明瞭である。西地区3tr. 溝1の底面直上から出土した。弥生時代後期[9]。**39**は須恵器杯身。短く立ち上がる口縁部で、底部外面を回転ヘラ切り。東地区1tr. 土坑1から出土。飛鳥Ⅱと併行か。**40**は東地区2tr. 溝2から出土した須恵器杯身。口縁部の形状からみて古墳時代後期に属するものだろう。

註

1）遺物の年代観についても、終了報告作成時の担当者の所見をそのまま掲載している。
2）座標値は日本測地系による座標値である。世界測地系に変換した値はX=-151044.513、Y=-18813.722となる。
3）都山市教委 1992『神田環濠　付、下ツ道第2・3次発掘調査報告』都山市報告第3集
4）東側溝埋土と埋没後の路面状況や「小溝状」遺構との関連を明瞭に示す土層図がないため、記述の検証が困難である。
5）奈良時代の土器については以下の文献を参考にした。
　古代の土器研究会 1992『古代の土器Ⅰ　都城の土器集成』
　奈文研 2005『平城宮発掘調査報告XII―兵部省地区の調査―』奈文研学報第70冊
　西弘海 1986『平城宮の土器』『土器様式の成立とその背景』真陽社
6）永井久美男編 1996『日本出土銭総覧　1996年版』兵庫埋蔵銭調査会
7）TK43併行期前後のものが主体になると思われるが、全形がわかる資料が少ない。（田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店）以下の古墳時代の須恵器も同書を参照する。
8）飛鳥Ⅱと併行する土器群と思われる。（西弘海 1986「七世紀の土器の時期区分と型式変化」『土器様式の成立とその背景』真陽社）以下の七世紀代の土器も同書を参照する。
9）1点しか出土していないが、大和第Ⅵ様式に属すると思われる。（橿考研 2003『奈良県の弥生土器集成』橿原考古学研究所成果第6冊）

第Ⅲ章　平城京南方遺跡の調査

1．周辺の既往の調査

平城京南方遺跡は、前記のように2005～2007年の大型店舗（イオンモール大和郡山）建設に伴う発掘調査で平城京九条大路以南での条坊道路遺構が発見されたことによって周知された遺跡である(1)。遺跡の範囲が行政的に周知されたのは2009年である（奈良県教育委員会、平成21年12月14日付教文7096号）。遺跡の範囲は平城京九条大路以南のさらに一条分南方の全域となっている。ただし、現在条坊遺構が明確に確認できるのは左京域のみであることや、廃絶時期が奈良時代でも早いこと、九条大路に設けられた羅城門との関わりなど、多くの課題がある。当遺跡の範囲内には左京域には長塚遺跡、右京域には郡山城が含まれている。それ以外の範囲は遺跡として周知されていなかったこともあり、これまでほとんど発掘調査がおこなわれていない。

今回の調査地は九条大路推定地の南に隣接する。北方は京内で、市街化が早くから進行したことから調査事例が一定数あるが、南方は調査事例が少ない。主な既往の調査地を図20に示した。調査地のすぐ東では奈良文化財研究所による調査（奈文研141－8次）がある(2)。この調査については次節で調査の経緯と合わせて述べる。東方には上記した2005～2007年の調査地がある。この調査では平城京九条大路以南の条坊遺構だけでなく、羅城と推定される遺構を確認している。今回の調査成果とも密接に関連するもので、後章で詳述する。北方では、1985年に奈良県立橿原考古学研究所(3)、2003年に奈良市教育委員会（奈良市508次）(4)によって、比較的広範囲が調査されている。両調査

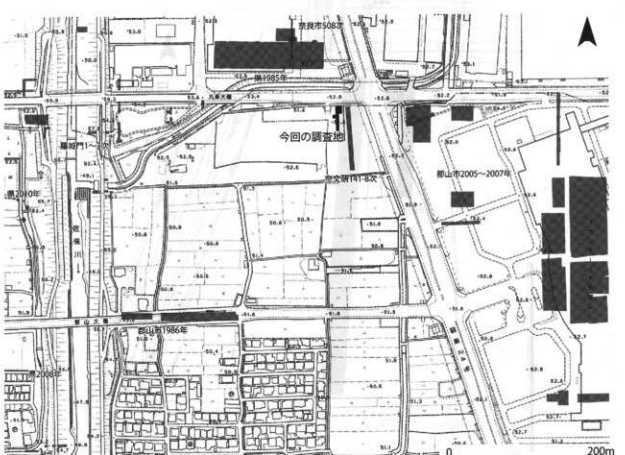


図20．調査地位置図（1/5000）

では南流する幅70m以上の古墳時代から鎌倉時代の河川跡を確認している。また、十二坪内では掘立柱建物や坪内を区画する溝、多量の土器を埋納した土坑群など、奈良時代の遺構や遺物を多数確認している。西方では1969～1972年に３次にわたり羅城門周辺の調査がおこなわれた[5]。羅城門本体の遺構は未検出だが、基壇の一端や隣接する朱雀大路西側溝・九条大路北側溝など奈良時代の遺構や遺物を確認した。門本体の構造については周辺の成果から緻密な研究が進められているが[6]、門に取り付くと思われる羅城を含め、これらの構造を明確に示す遺構は確認されていない。調査区の南方では大和郡山市教育委員会による都市計画街路北廻り線建設に伴う長塚遺跡の調査がある[7]。古墳時代後期の溝や古墳のほか、奈良時代の土坑や掘立柱建物、溝を検出している。建物と溝には平城京条坊の方位に似るものと全く異なるものとの２種があり、近年の成果をもとに再検討する必要があろう。この他、奈良県立橿原考古学研究所によって、佐保川や蟹川の改修に伴う調査が部分的におこなわれている[8]。両河川は調査地の周辺ではほぼまっすぐ南流しており、下ツ道との関連からも注目されるが、道路に関わる明確な遺構は検出されていない[9]。周辺は条里制の研究からも早くから注目されてきた地域であった一方[10]、発掘調査による資料は多くない。また、調査地の北に接する道路は平城京九条大路を踏襲しているものとされるが、この道路に関する遺構検出例も少ない[11]。これら京南辺をめぐる諸問題については、近年になりようやく資料が蓄積されつつある状況にある。

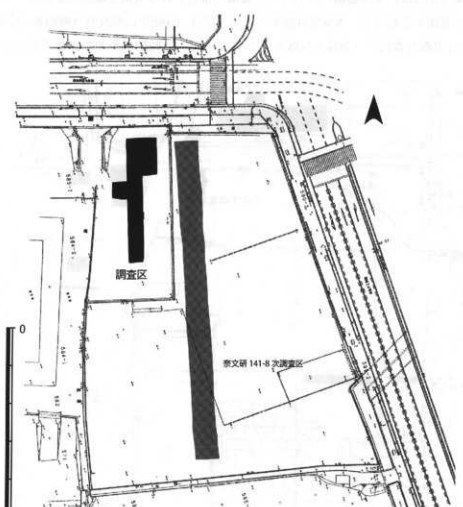


図 21. 調査区配置図（1/1000）

2．調査の成果

A　調査の概要と経過

今回の調査は、下三橋町586・587における三井石油株式会社・株式会社ローソンによるガソリンスタンドおよびコンビニエンスストア建設に先立つ発掘調査である。開発用地の面積は約5900㎡で、用地の大部分は1982年に資材置場として盛土造成されている。この造成事業の際、奈良国立文化財研究所（当時）が発掘調査をおこなっている(12)。調査は用地の中央に幅６m、長さ84mの調査区を設けておこなっており、北半で奈良時代の溝を、南半で古墳時代の流路を検出している。この事業による盛土は隣地に水田が残る南端でみると2.4mあり、敷地の北西隅の一画を除いた全域で同程度の盛土がなされている。今回の事業では、新規の建物建設による掘削は盛土内におさまる。掘削が深くなるのは地下のガソリンタンクや雨水貯水槽に限られ、それらの施設も過去に調査した位置に設置されることとなった。

一方、2005～2007年に事業地の東方でおこなった調査で平城京の羅城と推定される東西方向の柱列が検出され、この遺構の西延長部分が今回の事業地を通っていることが明らかになった。また、この遺構が羅城門まで続いていると想定して事業地の周辺をみると、既に工場や駐車場として造成されている部分で占められており、今後調査ができる目途がほとんどない状況にある。そこで、大和郡山市教育委員会は原因者と調整を重ね、事業による地下への掘削がない敷地北西隅の盛土が少ない一画で、遺構有無の確認を目的とした発掘調査をおこなう協力を得ることができた。

調査は前記した盛土が少ない一画に南

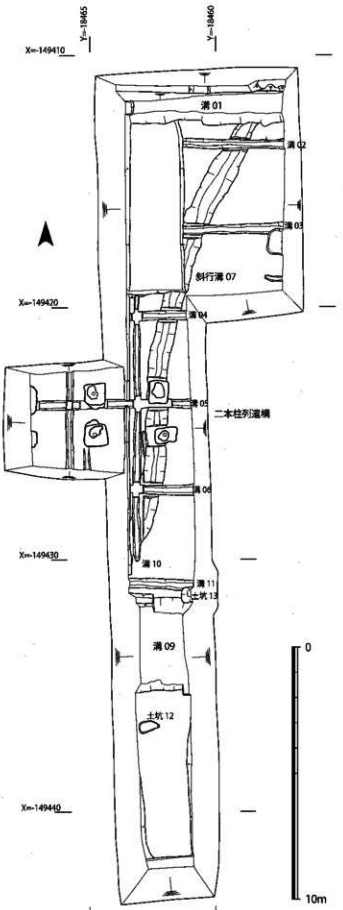


図 22．調査区平面図（1/150）

北方向に長い調査区を設けておこなった。調査区の幅は４ｍで長さが32ｍ。遺構の状況から北部と中央部に拡張区を設けたため、最終的な調査面積は190㎡となった。調査は2011年８月４日から24日まで実働14日間おこない、バックホー（0.45）のべ６台、作業員のべ51人、補助員のべ９人を要した。

調査は北端から着手した。調査区の北部については遺構面となる基盤層について誤認があり、一部を一層下位まで掘り下げている。調査区中央部分に差しかかった時点で、主目的となった柱列の延長と思われる遺構を検出した。この遺構が確実に目的の遺構であるかを確認するために中央部をさらに西方に、また、柱列北方の様相が既往の成果とやや異なっていたことから北部を東方にそれぞれ調査区を拡張した。今回の事業は遺構への影響がないことから、調査による遺構の掘り下げは部分的なものにとどめた。ただし、柱穴に先行する溝を含め、溝の多くは年代を判断する必要があったため底まで掘り下げている。遺構の掘り下げが終了した18日に撮影台を組んで全景を撮影し、柱穴の部分的な掘り下げによる補足調査の後、調査区を埋め戻した。図化は調査区内に移設した基準点からすべて手測でおこなった。詳細な経過として以下に調査日誌を掲載する。

調査日誌

8.4 バックホー、調査機材搬入。周辺の草刈。調査区設定後掘削開始。北端に東西方向の溝状おちこみ。表掘り溝よりも新しい。遺構面の認定困難。遺物ほとんどなし。

8.5 斜方向の溝、東西方向の素掘り溝、土坑？検出。瓦が出土し、奈良時代と思われる。遺構面の誤認に気付く。包含層の遺物量次第に増える。調査区北端部東方に拡張する準備を始める。午後は断続的な降雨により作業進まず。

8.8 北端部拡張。北端の東西溝一帯に現代の大規模な攪乱。中央の土坑はややずれがあるが南北に２基並ぶ。柱穴か。

8.9 北端拡張部遺構精査。斜行溝延長、東西素掘り溝検出。遺構は斜行溝→素掘り溝→柱穴の３段階の変遷。柱穴延長西方拡張部設定、掘削。柱穴の続きを確認。「羅城」柱列延長部の可能性高まる。過去調査検出分と位置関係が整合する。

8.10 調査区南へ掘り進める。柱列精査続行。柱列南で幅４ｍの東西溝検出。

8.11 柱列南の東西溝掘り下げ。遺物少ない。東西方向の素掘り溝は南に分布がひろがらない。南方は湧水により作業難航。調査区土層図実測開始。

8.12 北端の東西溝掘り下げ。底付近から瓦質土器出土。柱列付近の遺構検出状況撮影。土層図実測継続。平面図用割付開始。

8.15 柱穴の埋土を一段下げて抜取痕跡を検出。斜行溝掘り下げ。上層から瓦出土。平面図用割付継続。拡張区の土層図実測。

8.16 各遺構掘り下げ。平面図用割付終了後平面図実測開始。土層図実測追記。

8.17 遺構掘り下げ継続。調査区南側から精掃。平面図実測継続。

8.18 全体精掃後、全景撮影。各部の撮影も並行。撮影後平面図実測継続。

8.19 柱穴一部掘り下げ開始。午前中豪雨により作業中断するも、昼から再開。復旧に時間要する。平面図追記。遺構断面図など実測。

8.22 週末の雨により遺構など水没。復旧に時間要する。柱穴一部掘り下げ継続。図面追記。機材一部撤収。

8.24 埋め戻し。機材撤収。現地での全作業終了。

B　層序と遺構

基本層序

調査区の基本層序について西壁の土層図によって報告する（図23）。現在の地表面は1982年の造成によるもので、調査区を設定した一画では厚さ0.8～0.9ｍの盛土（１層）を除去して旧表土（２層）に達する。旧表土は厚さが約20㎝あり、以下には青灰色粘質土層（３層）と暗青灰色粘質土層（４層）がある。どちらも鉄分の沈着が目立つ土で遺物を含まず、調査区の南北で厚さがほとんど変わらない。４層下には瓦器の小片を含む青灰色粘質土層（５層）が堆積する。この層は南に向かって堆積が次第に厚くなり、北端では約20㎝、南端では約30㎝の厚さとなる。溝01や上層素掘り溝はこの上面から掘りこまれる。中央部分では瓦の小片など奈良時代の遺物がやや多いが、南北端に向かって遺物量が少なくなる傾向がある。５層除去後の標高50.4～50.6ｍで黄褐色～明褐色の砂質土を主

体とする基盤層となる。やや均質さに欠き、青灰色粘質土が混入するものの、広く安定した堆積で遺物を含まない。奈良時代の遺構はこの上面で検出される。この層を上面より10～20cm掘り下げると均質でしまりの良い黄褐色粘質土層となる。調査開始直後はこの下位の堆積層を基盤層と判断したため、調査区の北端部をこの上面まで掘り下げてしまっている。基盤層は標高50.1mで暗褐色の粘土層となることを溝01や溝09を掘り下げた部分で確認している。

遺構

検出遺構には素掘り溝や溝、柱列などがある。5層の上面で検出される遺構を上層遺構、基盤層の上面で検出される遺構を下層遺構と二分することができる。遺構の位置は図22に示した。また、上層では幅約30cmの素掘り溝が検出される。今回は下層遺構の調査を主目的にしたため精査していないが、一部の溝が深く、基盤層にまで達している。

溝01　調査区北端に位置する東西方向[13]の溝で、5層の上面から掘りこまれる上層遺構[14]。長さ6.3mを検出した。

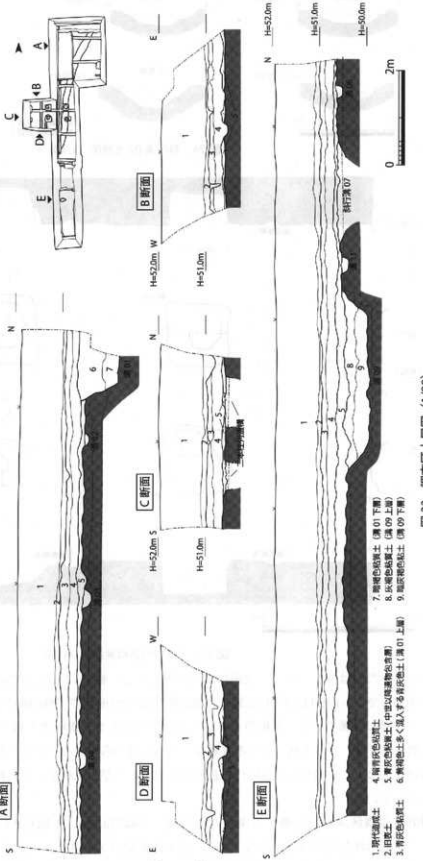


図23. 調査区土層図（1/80）

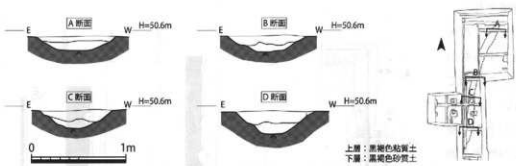


図 24. 斜行溝 07 土層図（1/40）

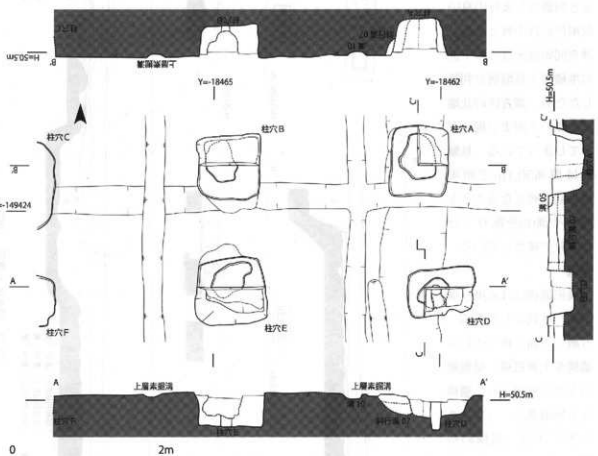


図 25. 二本柱列遺構実測図（1/50）

検出できたのは南岸のみで、北岸は調査区外となる。幅は1.5m以上ある。南肩の国土座標値はY=-18460mでX=-149412.78mである。断面形状は逆台形状で、検出面からの深さは約85cm。埋土は上下2層に分層できる。黄褐色土ブロックが多く混入する青灰色土層（図23－6層）と暗褐色粘質土層（同7層）で、上層にあたる6層は人為的に埋められたことにより形成された層と考えられる。遺物は少なく、6層から奈良時代の瓦が少量出土したが、7層からは瓦質土器が出土し、遺構の時期を示している。

溝09　調査区南半に位置する東西方向の溝。上幅約3.7m、下幅約2.7m、残存する深さは約50cmで、断面形状が逆台形状となる。溝心の国土座標値はY=-18462mでX=-149433.35mである。埋土は上下2層に分層できる。上層は灰褐色粘質土層（図23－8層）、下層は暗灰褐色粘土層（同9層）となる。出土遺物には奈良時代の須恵器小片や瓦があるが、量は少なく時期は明確でない。一定量の流水があった痕跡はなく、溝01のように明瞭に人為的に埋め戻したとするような痕跡もみられない。

溝02～06・10・11　主に調査区北半で検出した、幅35～40㎝の溝である。溝10が南北方向で、他は東西方向。残存する深さは5～20㎝と一定でない。5層除去後に検出されるもので、上層の素掘り小溝とは明らかに異なり、「下層素掘り小溝群」と呼称する。埋土は溝11が暗褐色砂質土で他は黄褐色粘質土。東西方向の溝をみると、溝02～06は各溝の心心間距離が3.4～3.5mでほぼ一定であるのに対し、溝06と溝11との心心間距離のみが3.8mとやや異なる。埋土の違いとも合わせ注意しておきたい。これら東西方向の溝は、溝09を境に分布が南に広がらない。また、南北方向の溝10と東西方向の各溝との重複関係は明確でなく、一連で埋没したものと判断する。溝10の東西それぞれ4m以内では同方向の溝が確認されない。遺物は少ないが瓦や須恵器、土師器の小片がある。重複関係から斜行溝07より新しく、二本柱列遺構より古い。

斜行溝07　北東～南西方向のゆるやかに蛇行する溝。北端を溝01によって破壊され、南端は調査区外へのびる。上幅は約1mで、断面形状がゆるいU字形となる（図24）。検出面からの深さは北端周辺で約15㎝、南端周辺で約25㎝。底面の標高は50.3～50.4mで南に向かってゆるやかに低くなる。埋土は上下2層からなり、上層は黄褐色土を多く混入する黒褐色粘質土、下層が黒褐色砂質土となる。上層は人為的に埋めた土の可能性がある。遺物はほとんど含まず、下層から弥生土器が1点、上層から奈良時代の瓦小片が出土したのみである。上層の遺物より奈良時代に埋没したものと判断できる。重複関係から下層素掘り小溝群より古い。

二本柱列遺構　調査区中央で検出した掘立柱列（図25）。2条の東西方向の掘立柱列が並列する構造で、調査区内で6基の柱穴（東西2間分）を検出した。東西端はそれぞれ調査区外へ続く。中心の国土座標値はY=-18464.8mでX=-149424.22mである。今回の調査は柱穴の規模を確認できる最低限の掘り下げでとどめている。柱の掘方は平面形が隅丸方形で、一辺0.6～1.1mと規模にばらつきがある。深さは検出面から35～50㎝ある。すべての柱穴で柱の抜取穴が確認できる。抜取穴は平面形が径40～60㎝の不整円形を基本とし、ほとんどが柱掘付の際の掘方内部で検出される。抜取りに際して柱の周辺をあまり大きく掘削していないようだ。抜取穴の埋土には奈良時代の瓦片が多く詰めこまれている。掘方の底部付近では柱痕跡が残るものがあり（図25－柱穴B・D・E）、径12～16㎝の柱を用いたことがわかる。柱穴Dでは柱根の基底部に瓦の小片が詰めこまれていた。柱穴の心心間距離は東西が約2.7m（9尺）、南北が約1.6m（5尺）である。上部の構造は不明だが、遺物出土状況などより瓦葺きの屋根が設けられたことが想定できる。周辺にこの遺構と直接関連すると思われる遺構はない。重複関係から下層素掘り小溝群より新しい。柱穴周辺の遺構の重複関係については、図26に示したように、斜行溝07→下層素掘り小溝群→二本柱列遺構となる。調査地の東方で2005～2007年におこなった調査で検出された遺構と一連のものと判断でき、両遺構の関連については次章で記述する。

図26. 主要遺構横断図（1/100）
調査区西壁断面より作成。柱列周辺は見通しを合成

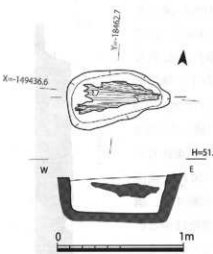


図 27. 土坑 12 実測図（1/30）

土坑12　溝09の南で検出した土坑（図27）。平面形は長径0.8m、短径0.4mの歪な円形で残存する深さは約30cmある。埋土は暗青灰色粘土で、中に60cm大の自然木がある。木には特に加工痕跡などがない。他には遺物が出土していないため、性格や時期は不明である。

土坑13　溝09の北で検出した土坑。東端が調査区外となるが、平面形は一辺約0.6mの隅丸方形になると思われる。残存する深さは約45cmで、埋土は灰褐色砂質土。重複関係から溝09や溝11より古いことがわかる（図28）が、遺物が出土せず時期は不明。

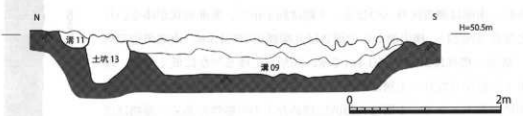


図 28. 溝 09・11、土坑 13 の重複関係（1/50）

C　遺物

遺物は整理用コンテナ10箱分の土器類や瓦が出土した。大部分が瓦の小片で、土器類は少ない。遺物包含層中の遺物量も少なく、二本柱列遺構を中心とする調査区の中央でやや量が多かったが、南北に離れると遺物量が減少する傾向があった。今回の調査では溝が多数検出されたものの、ほとんど遺物を含んでおらず、遺構の年代を判断する手がかりはやや少ない。

瓦（図29）

今回の調査で最も多く出土した遺物であるが、小片が多く、全形だけでなく種類も不明な資料が多い。丸瓦と平瓦が多数を占めるようで、軒瓦や明確に道具瓦と判断できるものはない。これらの瓦は基本的に二本柱列遺構に伴うものが多くを占めていると思われる。出土瓦の総重量を表２に示した。総量は約29kgで、判明している丸瓦と平瓦の割合はおよそ１：２となる。半数が二本柱列遺構からの出土で、次いで包含層からの出土が多い。層序の項でも述べたが包含層中の遺物は二本柱列遺構がある調査区の中央付近に多く、総合してみると二本柱列遺構とその周辺の包含層中に分布が集中する傾向が認められる。瓦は丸瓦、平瓦どちらも小片が多い。その中でも比較的大きめの破片を３点図化した。**41**は丸瓦の玉縁周辺の破片。灰白色の色調を呈し、焼成不良で調整の観察が困難である。凸面はナデ、凹面には３cm四方に16×15本の布目が残る。側面は丁寧にケズリ。**42**と**43**は平瓦の小片。どちらも焼成不良。色調は42が灰色、43が灰白色。凸面に縦方向の縄タタキがあり、３cm幅での縄の単位は42が15本、43が19本。42は側面を２面にする。凹面の布目は３cm四方で42が26×25本、43は20×27本。凹面に桶枠痕跡などはなく、一枚造りと思われる。他の図化していない小片も

同様である。43は側面付近で凸面側に粘土を付け足した痕跡がある。

土器類（図30）

土器類は出土量が少なく、図化できる資料は限られる。奈良時代の土師器、須恵器の他、瓦器や瓦質土器がある。以下、図30に沿って報告する。**44**と**45**は遺物包含層から出土した。44は土師器高杯で脚部と杯部との接合部。焼成は良好でなく、胎土はやや粗い。脚部外面はケズリで８面に面取りする。45は須恵器杯蓋の口縁部の小片。約1/16が残存する。**46**は弥生土器底部の小片。磨耗により器表面の調整は不明。斜行溝07下層から出土。今回の調査では当該時期の遺物はこの１点に限られる。**47**は瓦質土器擂鉢。溝01から出土。底部外面付近にはタタキの痕跡が残る。内面には１単位が13条の擂り目がある。**48**と**49**は溝09出土土器である。48は土師器竈。焼成不良で内外面が磨耗する。49は瓦器椀底部。ややふんばる高台を付す。内外面が磨耗し見込みの暗文などの観察ができない。検出面付近からの出土で、直上の遺物包含層のものである可能性もある。

表２．出土瓦の重量

出土位置		丸瓦	平瓦	不明	計
包含層		1.58	4.21	5.73	11.52
上層素掘り小溝		0.07	0	0.11	0.18
溝01		0.08	0.23	0	0.31
溝09		0.11	1.9	0.3	2.31
斜行溝07		0	0.11	0.16	0.27
下層素掘り小溝群		0	0	0.06	0.06
小計		1.84	6.45	6.36	14.65
二本柱列遺構	柱穴A	0	0.86	0.29	1.15
	柱穴B	1.96	4.41	2.73	9.1
	柱穴C	0	0.03	0.01	0.04
	柱穴D	1.06	0.78	0.38	2.22
	柱穴E	1.46	0.3	0.11	1.87
	柱穴F	0	0	0	0
小計		4.48	6.38	3.52	14.38
総計		6.32	12.83	9.88	29.03

単位はkg

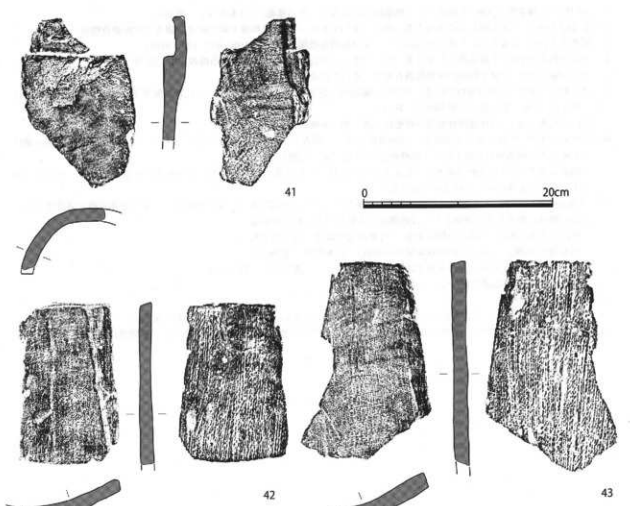


図 29．平城京南方遺跡出土瓦（1/4）

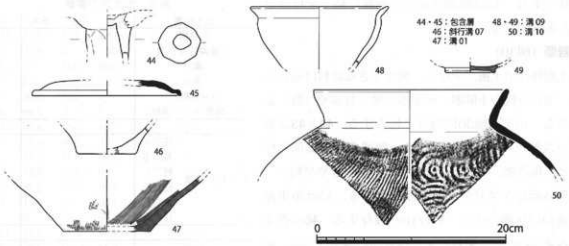


図 30. 平城京南方遺跡出土土器（1/4）

50は須恵器甕の口縁部で下層素掘り小溝群のひとつである溝10からの出土。口縁部をヨコナデ、体部の内外面はタタキ痕跡が明瞭。

註

1）山川均・佐藤亜聖 2008「平城京・下三橋遺跡の調査成果とその意義」『日本考古学』第25号
2）奈文研 1983「九条大路および京南辺部の調査　第141-8次」『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
3）橿考研 1986「平城京左京九条一坊五坪・十二坪発掘調査概報」『県概報1985年度（第二分冊）』
4）奈良市教委 2006「平城京跡（左京九条一坊十二坪）の調査　第508次」『奈良市概報平成15年度』
5）奈文研編 1972『平城京羅城門跡発掘調査報告』都山市教委
6）井上和人 2004「平城京羅城門再考－平城京の羅城門・羅城と京南辺条条里－」『古代都城制条里制の実証的研究』学生社（初出は1998『条里制古代都市研究』第14号）
7）都山市教委 1987『長塚遺跡発掘調査概要報告書』都山市概要8
8）橿考研 2009「平城京朱雀大路延長（西側溝推定地）の調査」『県概報2008年（第一分冊）』、同 2010「平城京南方遺跡（朱雀大路西側溝南延長推定地）」『県概報2009年度（第三分冊）』
9）前掲註8橿考研2009文献の調査で、朱雀大路を南に延長した位置で溝状の落ち込みを断面で確認している。ただし、報告中にもあるようにその性格は明らかでない。
10）京南辺条条里が特に大きな問題として議論の対象となっていた地域である。条里地割の下で条坊関連遺構を確認する以前のこの地域に関する主な研究としては前掲註6文献や以下のものがある。
　秋山日出雄 1962「平城京の特殊条里」『近畿古文化論攷』吉川弘文館
　岩本次郎 1980「平城京京南特殊条里の一考察」『日本歴史』第387号
　藤井暁 2004「大和国京南辺条条里地割の規格について」『鷹陵史学』第30号
11）九条大路に関連する諸問題については次章で述べる。
12）前掲註2文献
13）以下の記述にあたり、単に東西または南北方向とだけ記したものは、正方位に沿った方向を指向しているものである。
14）今回の調査区内で確認し、報告する遺構ではこの溝01のみが上層遺構である。他はすべて下層遺構に属する。

第Ⅳ章　総括

1．稗田・若槻遺跡

市道高田稗田美濃庄線建設に伴って1997年度と2007年度に合わせて約850㎡を調査した。稗田・若槻遺跡は第1章でも述べたように遺跡の範囲が広く、今回報告する調査対象地はその一部分でしかない。加えて、今回の調査区内は遺構や遺物がやや希薄で、遺跡の実態を考察するための資料が多くはない。しかしながら、遺跡の評価に関わる重要な成果をいくつか得ることができた。以下、遺跡の各時期における変遷と、調査対象となった東西約330m一帯の層序をまとめる。また、今回の調査区内を縦断する下ツ道に関連する検出遺構については、さらに別項を設けて述べる。

A　遺跡の変遷

弥生時代　一連の調査で最も古い時期の遺物は、図19に示した2007年度調査西地区3tr.（以下、2007年度の調査は単に「西（東）○tr.」と略記する）溝1出土の弥生土器（38）である。後期に属する長頸壺の体部で、溝の底直上から1点出土したのみである。この溝1は西3tr.溝2と埋土の状況が類似し、調査区外で合流するものと考えられる。溝は幅5～5.5m、深さ1.2m。底の付近ではある程度の流水の痕跡があるが、上位は粘土が堆積している状況である。湿地状のくぼ地となり、ゆるやかに埋没したものと考えられる。どちらの溝からも他に遺物が出土しておらず、ただちにこの土器の年代観を遺構に与えてよいかは慎重に判断する必要がある。

古墳時代　2007年度調査東地区で当該時期に属する遺構と遺物を確認したが、総量は少ない。西地区ではまったく確認されていない。どの遺構も土器の残存状況が良好でなく、詳細な時期を判断できない。この時期に属する遺構が比較的集中していたのが東2tr.である。溝1と土坑1は、出土遺物が土師器の細片のみだが古墳時代に属するものと思われる。これらは埋土が類似し、他の調査区では同様の埋土の遺構がない。隣接する溝2からは後期の須恵器の小片が出土している。先述した土坑などもこの溝2と時期が大きく離れない可能性がある。東方の東4tr.溝3は、後世の遺構であるが古墳時代後期の遺物が一定量出土しており、2007年度調査区の中央付近に後期の遺構や遺物の分布が集中する状況を認めることができよう。東3tr.溝1、東4tr.溝1・2からも土師器の小片が出土しているが、時期は不明である。

古代　古代の遺構で最も注目されるものは下ツ道の関連遺構だが、これらについては後述する。その他の遺構で時期をある程度推測できるものは東1tr.の土坑1と東4tr.の溝3である。どちらも7世紀前半に属すると判断できる土器類が出土している。東1tr.土坑1の埋土と他の周辺にある落ち込みや溝1の埋土は同質である。東1tr.の東端付近に位置するこれらの遺構は廃絶時期にそれほど差がないと考えられるが、この遺物をもって年代を断定することはできない。東4tr.溝3は幅5～7.5mの溝で、古墳時代後期の土器が混入しながらも7世紀前半の土器が先述の東1tr.より多く出土している。当該時期に周辺で一定の活動があったことは認めてよいだろう。この溝の最上層からは凸面に縄タタキ痕跡を残す平瓦の小片が出土しているが、時期は不明である。

中世以降　調査地全体から瓦器の小片が出土しているが、遺構からの明確な出土は西3tr.の土坑1のみである。各調査区で耕作に関すると思われる素掘り小溝が確認されたが、それらについて遺物や層序から明確な時期を求めることは難しい。遺構も希薄である。今回の調査区一帯は、遅くとも中世以降には耕地としての土地利用が主体的となったと思われる。

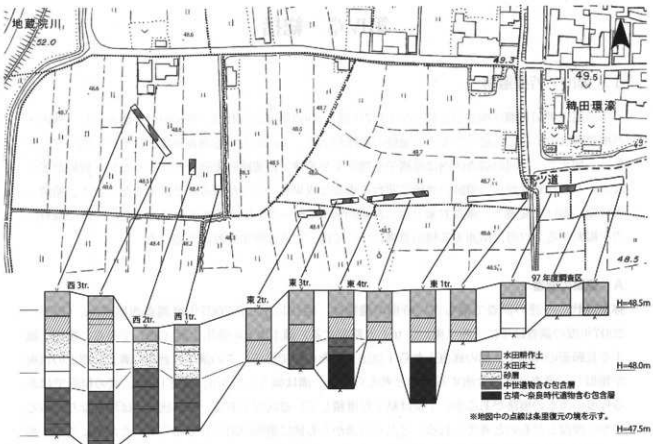


図31．調査区の土層柱状模式図　上図は1/2500、柱状図は1/30

B　調査地周辺の旧地形

今回の調査では対象となった東西約330mの範囲における旧地形に関する資料を得ることができた。調査地一帯の水田には条里地割が残存しており、条里復元によると添下郡京南三条一里と添上郡京南二条一里に該当する(1)。ところで、今回の調査区周辺における水田の地割には、南北正方位と比べると斜方向へ傾きのある部分が存在している。具体的には、添下郡京南三条一里六坪に復元されている、2007年度調査区の東西両地区の境付近で地割が乱れている。今回の調査区では東2～4tr.の付近にあたり、北で東に傾く方位をとる地割となっている。この付近の小字は「六ノ坪」であり、隣接する地名も条里の坪が由来となったものである(2)。現地表面の標高をみると、南北では南に、東西では西にゆるやかに下っている。ただし、西地区と東地区の境付近からは、西方を南流する地蔵院川に向かって再び標高が高くなっている。調査前は、この地割の乱れが旧河川の痕跡を示している可能性を想定していた。

図31に各調査区の基本層序を示した。各地区の基盤層上面の標高を比較すると、若干の起伏があるが全体としては西に向かって標高が低くなっていることを確認できる。東からみると、下ツ道の東西で標高が西に一段下っている。東西での高低差は約30cmあり、東1tr.西端に向かってさらに約20cm低くなっている。ところが、西方の東4tr.では標高48.4mで基盤層となる。これは東1tr.西端よりも50cmほど高く、下ツ道路面とほぼ同様の標高である。東4tr.の西半部で標高を減じるが、東2・3tr.で再び高くなる。西地区では西1tr.で標高47.6mと再び低くなり、以西はゆるやかに標高を減じている。以上の状況より、先述した地割の乱れは、埋没した河川でなく微高地状の地形が影響した可能性が考えられる。そして、基盤層の標高が低い部分は、東地区では古墳時代から奈良時代の遺物包

含層により埋没し、西地区では中世以降に遺物包含層が形成されるようになる。ところで、西地区一帯では耕作土と床土を除去すると広範囲に砂層が堆積している。この砂層の形成は近接する地蔵院川の氾濫によるものと考えられる。西地区の現況にみられる川に向かって再び標高が高くなる地形はこれらの砂層堆積が影響しているようだ。これら砂層からは遺物が出土しておらず、形成の時期を判断することができない。

C　下ツ道の関連遺構

97年度調査区では下ツ道推定地で幅10.3m、深さ約２mの南北方向の大規模な溝を検出した。下ツ道は奈良盆地を南北に縦走する古代の幹線道路であり、これまで考古学のみならず、文献史学、歴史地理学など多方面から研究が進められてきた[3]。特に調査地周辺は、書紀に稗田の地名があることからも注目される。97年度調査で検出したこの溝は、既往の調査[4]や周辺の地割からみて下ツ道の東側溝と判断して間違いない。溝からは奈良時代後半を主体とする土器類が出土し、埋没は９世紀代と考えられる。調査終了後に作成された終了報告によると、東側溝の西側にある幅約１m、深さ0.2mの南北溝[5]は、埋土の状況が東側溝と同様に砂礫を主体とすることから、近い時期に存続していたとされる。また、下ツ道と同様に南北方向を指向していることから、道路と関連する遺構と推定されている。しかし、この遺構は出土遺物がなく、調査区北半では残存状況が良好でないこともあり、現時点では道路と関連する遺構かの判断を保留しておきたい。2007年度調査東1tr.の東端付近では幅2.0～2.7m、深さ0.2～0.5mの南北方向を示す溝１がある（以下、「07年溝１」とする）。この遺構についても位置や状況から下ツ道との関連が想定されるが、出土遺物からは時期を明らかにすることができず、東側溝との関連の把握が困難である。そこで、各遺構の位置についてまとめ、遺構間の関連を検討してみたい（図32）。

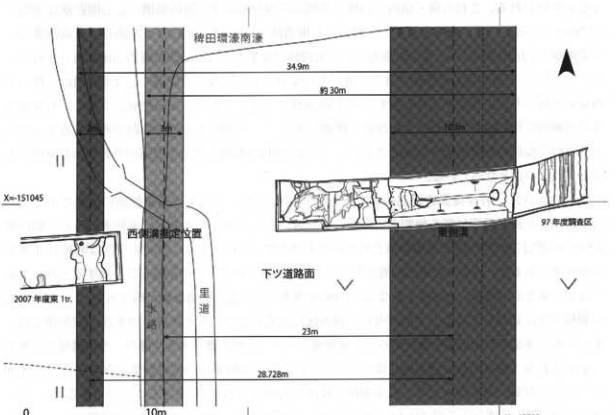


図 32.　下ツ道関連遺構（1/300）

表3．下ツ道の幅員

位置	調査次数など	西側溝幅（深さ）	東側溝幅（深さ）	心心間距離	路面幅	外側幅	備考	文献
平城宮	奈文研367・	1.5～2.2	1.0～1.9	20.1～	19.0～	23.2～		10
朝堂院	376・389次	(約0.9)	(約0.2)	22.4	20.5	23.7		11
平城宮	奈文研119次	約2.9	1.3～1.8	24.1～	21.6～	26～		7
朝堂院南門		(0.6～0.7)	(0.4～1.0)	24.9	22.3	28.6		
平城宮	奈文研16・17次	2.8～3.0	4.5	約24	約21	28～29		6
朱雀門北方		(0.6～0.8)	(0.1～0.3)					
平城京	奈良市119次	3.1～3.5	1.5～2.5	22.4	19.6	24.8～		18
三条条間北小路		(0.8～1.0)	(0.4～0.6)			25.2		
平城京	奈良市356次	3.1～3.5	1.5～2.5	23.4	20.5	約26		18
三条条間北小路		(0.8～1.0)	(0.4～0.6)					
平城京	橿考研2007・	約4.5	1.9～2.4	23.2	約20	約27.2	調査区南北に20m離れる。	4
三条大路	2009年	(0.6～0.7)	(0.4)					
平城京	奈良市103次	約6	約5	約22	約16.5	約27.5	西側溝下層で幅広の溝。	14
五条条間路		(約0.7)	(約0.8)					
平城京	奈文研1974年	約4	約4.5	約23	約18.8	約27.3	東側溝下層に大溝。	12
六条条間北小路		(0.2～0.7)	(約0.4)				調査区南北に70m離れる。	
稗田・若槻遺跡	橿考研1980年	約3	約11	23	約16	約30		2
		(約1)	(約2)					
八条遺跡	橿考研2003・	0.8～1.0	約4.2	22.5	20.1	約25	「SD15」と「SX01」を両側溝とした場合。	3
	2004年	(0.6)	(約0.8)				東側溝は南半で幅7.5m以上のSX101。	

単位はm

東側溝と07年溝1は両溝の心心間距離が28.73m、外側幅が34.9mとなる。この距離を検証するにあたり、まず、既往の調査で明らかになっている下ツ道の幅員を参考にする（表3）。発掘調査で下ツ道の両側溝が確認されている例は平城宮内で3箇所、平城京内で5箇所、平城京より南では、大和郡山市稗田町と八条町の2箇所がある。下ツ道は既往の研究から明らかなように、平城京の造営にあたって同じ位置に朱雀大路が設定されたため、宮や京内を通る下ツ道の側溝は造営時に埋められている[6]。よって、宮・京内で確認された側溝の状況は奈良時代以前の状況を、より良好に反映しているものと思われる。これら宮・京内での検出事例から導かれる下ツ道両側溝の心心間距離は平均で22.95mとなる。一方、京外をみると、稗田・若槻遺跡で1980年におこなった調査では両側溝の心心間距離が23mである[7]。さらに南方での八条遺跡の成果からは心心間距離22.5mに復元されている[8]。どちらも東側溝の規模が大きく、溝の埋没が9世紀代となる。側溝の心々間距離は、後の平城京の内外どちらに位置するかに関わらず23m前後で一定しており、この規格が少なくとも盆地北半の広範囲に用いられていたことを改めて確認できる[9]。地割に下ツ道の痕跡が残存する部分から求められる幅員の平均値は約30mとされ[10]、やや大規模な側溝を含めた道路の外側幅の計測値と大きく離れない値となっている。

既述のように、97年度調査検出の溝が南方で1980年に検出した下ツ道東側溝の延長であることは、遺構の状況や周辺に残る地割の痕跡からも間違いない。図32によると、東側溝から心心間距離23mの位置は2007年東1tr.東端の東方約3mの未調査部分に相当する。図32の下図は昭和48年測量の現況図であるが、西側溝の推定位置はちょうど稗田環濠の西辺とその南延長に位置する水路（あるいはその東を沿う里道）の位置と重なる。1980年調査の下ツ道西側溝は幅が約3mで[11]、そのままの規模で北に延長しているとすれば今回の調査区には入らないこととなる。つまり、07年溝1は、他の位置で確認された成果と比較すると、東側溝からは心心間距離が大きく離れ、西側溝推定位置から心心間距離で約6m西を通る南北溝ということになる。東側溝との位置関係をみた場合に07年溝1と同様の位置にある溝として、八条遺跡で検出した南北溝SD16をあげることができる[12]。このSD16は幅1.3m、残存する深さ0.3mの規模で飛鳥時代後半の土器が出土し、奈良時代の下ツ道西側溝とした溝SD15とは心心間距離で6.5m西に位置する。下ツ道東側溝としたSX01との心心間距離は

表4．下ツ道東側溝一覧

	調査地	幅	深さ	中心座標 X値	中心座標 Y値	備考	文献
宮内	奈文研75・77次・大極殿院	1.5	0.2	-145402.550	-18577.990	削平著しい。	8・14
	奈文研367次・朝堂院	1.0～1.9	0.2	-145495.400	-18577.500		1・10
	奈文研376次・朝堂院	1.0～1.9	0.2	-145510.400	-18577.500	調査区南端では削平により未検出。	1・10
	奈文研140次・朝堂院	約0.6	約0.1	-145676.800	-18576.600		1・9
	奈文研119次・朝堂院南門	1.3～1.8	0.4～1				7
	奈文研16・17次・朱雀門北方	4.5	0.1～0.3	-145948.000	-18575.690		6・13
京内	奈良市119次・左3-1-2	1.5～2.5	0.4～0.6	-146161.000	-18574.600		18
	奈良市356次・左3-1-2	1.5～2.5	0.4～0.6	-146236.620	-18573.720		18
	奈良市403次・左3-1-3	約3	0.4～0.5	-146312.000	-18572.050	西側に分流あり。	19
	橿考研2007年・左3-1-4	1.9～2.4	1.2	-146546.400	-18572.400	2段構造。	4
	奈良市389次・左4-1-1	7.0以上	1.4	-146661.000	-18570.230		17
	奈良市328次・左4-1-2/3	2.9→3.2以上	1→1.2以上	-146811.000	-18570.200	改修あり。	16
	奈良市103次・左5-1-2/3	約5	約0.8	-147353.890	-18566.900		14
	奈文研1974年・左6-1-2	約4.5	約0.4	-147797.000	-18565.000		12・13
	奈良市124次・左6-1-3	約4	約0.3	-147915.000	-18564.010	削平著しい。	15
京外	磯出・碧郷遺跡（郡山市1983年）	14.8	1.1以上	-151171.090	-18555.940	調査まで掘り下げていない。	5
	磯出・若槻遺跡（郡山市1998年）	10.3	約2	-151391.000	-18552.370		本書
	磯出・若槻遺跡（橿考研1980年）	約11	約2	-151675.000	-18548.200	幅15mの川との合流地点。	1・2
	八条遺跡	3.6～4.2	0.8	-155016.510	-18532.880	南で幅7m以上の南北溝に取り付く。	3

座標値は日本測地系による。単位はm

表3・4文献

1．入倉徳裕 2009「京南辺条条里と平城京朱雀大路・下ツ道の関係について」『条里制・古代都市研究』第25号
2．橿考研 1982「神田・若槻遺跡発掘調査概報」『県概報1980年度（第二分冊）』
3．橿考研 2006『八条遺跡』奈良県立橿原研究所報告第94冊
4．橿考研 2010『平城京朱雀大路・下ツ道』奈良県文化財調査報告書第136集
5．郡山市教委 1992『神田環濠　付、下ツ道第２・３次発掘調査報告』郡山市報告第3集
6．奈文研 1978『平城宮発掘調査報告Ⅸ－宮域門・大垣の調査－』奈文研学報第34冊
7．奈文研 1980「推定第一次朝堂院南門の調査（第119次）」『昭和54年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
8．奈文研 1983『平城宮発掘調査報告Ⅺ　第1次大極殿地域の調査』奈文研学報第40冊
9．奈文研 1983「推定第一次朝堂院地区の調査　第140次」『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
10．奈文研 2005「中央区朝堂院の調査－第367・376次」『奈良文化財研究所紀要2005』
11．奈文研 2006「中央区朝堂院の調査－第389次」『奈良文化財研究所紀要2006』
12．奈文研編 1974『平城京朱雀大路発掘調査報告』奈良市
13．奈文研編 1982『平城京朱雀大路発掘調査報告』奈良市教委
14．奈良市教委 1986「平城京朱雀大路の調査　第103次」『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和60年度』
15．奈良市教委 1987「平城京朱雀大路の調査　第124次」『奈良市概報昭和61年度』
16．奈良市教委 1996「平城京朱雀大路の調査　第328次」『奈良市概報平成７年度』
17．奈良市教委 1998「下ツ道・平城京朱雀大路の調査　第389次」『奈良市概報平成９年度（第２分冊）』
18．奈良市教委 1999『史跡平城京朱雀大路跡一発掘調査・整備事業報告－』奈良市埋蔵文化財調査研究報告第2冊
19．奈良市教委 2000「平城京朱雀大路・下ツ道・尼辻東方遺跡の調査　第403次」『奈良市概報平成10年度』

29.08m、外側の幅は33.97mとなる。報告書では飛鳥時代の下ツ道に関連する溝と解釈されている。現在は資料が限られていることもあり、今回検出した07年溝１がこのSD16と同様のものとしてよいかは明らかではないものの、東側溝との位置関係が類似していることにはやはり注意が必要であると思われる。今回は下ツ道に強く関連する溝という評価に留めておき、今後の資料の増加を待ちたい(13)。

今回検出した下ツ道の東側溝について、他の地点で検出されている溝との関係をまとめておきたい。表４に大和郡山市域より北方(14)における下ツ道東側溝の検出事例を示した。今回の調査地がある稗田町周辺では、本報告例を含め３地点で東側溝を検出している（図33）。すべて幅が10m以上と以北での検出例よりも広く、埋没時期が９世紀代ということで共通する。遺存地割からも連続した溝とみて良いものである。この３地点の中心座標から回帰分析をすると、Y=-tan(0° 52′ 41.8″)X-20872.7(15)という式が導かれる。この傾きは、平城宮・京内での調査事例から考えられる北で西に0° 19′ 21.2″振れるという成果(16)や、遺存地割から求められた0° 17′ 30″の振れ(17)と比べる

と明らかに大きい[18]。この3地点のうち、最も北方に位置する市1983年調査例には、溝の幅が他よりも広い、調査区の幅が狭く十分な調査ができていないなど、やや不安定な要素がある。そこで、この地点を除いた2点から傾きを算出しても、0°50′28.4″と大きな傾きが求められる。この傾きでそのまま南北に溝を延長した場合、既往の調査成果とのずれはかなり大きくなる。ここで注意されることは、3地点のうち北の2地点は基盤層がやや脆弱な砂質であることで、特に1983年調査区では法面を補強する改修の痕跡も確認されている。また、県1980年調査区は下ツ道を横断する大規模な河川との合流地点にあることも注意される。つまり、出土遺物から奈良時代のある段階における一帯の側溝幅が以北と比べ大規模な状態であったことは疑いないものの、埋没するまでの間に溝肩の崩落などによる経年変化を想定する必要がある。よって、現時点ではこの3点のみで施工時や機能時の厳密な規格などを導くことは保留せざるをえない。ところで、他の検出地点を含めて計算した場合はどうか。この3点に約3.6km南方の八条遺跡の例を加えて直線を算出するとY=-tan(0°18′50.3″)X-19382となる。一見これまでの成果に近い数値を示すものの、分析結果と実数値の残差には±2.6mの幅があり注意を要する。さらに平城宮内まですべての東側溝心座標から直線を求めるとY=-tan(0°15′17.9″)X-19224とな

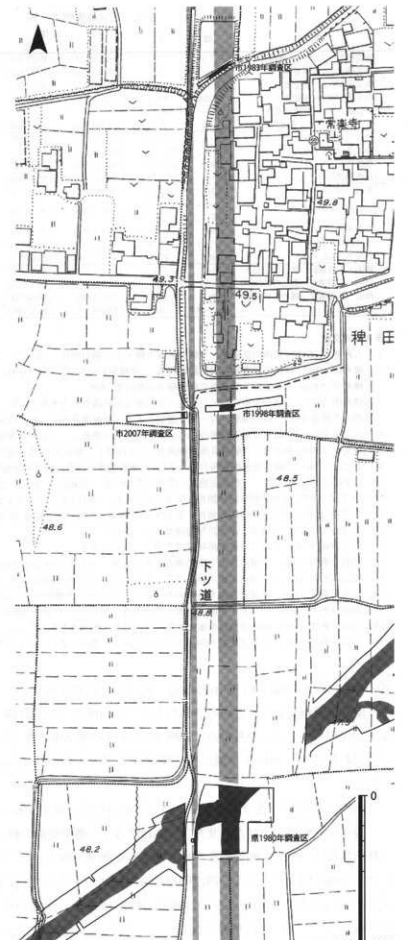


図33. 稗田・若槻遺跡における下ツ道関連遺構（1/2500）

る。残差は－4～2mとさらに大きな値を示すようになり、直線としての信用度に欠ける。下ツ道の側溝幅については、より南方での検出例が北方と比べて大きいことが早くに指摘されていたが[19]、東西両側溝の心心間距離でみると規格が一貫しているようにもみられる。この道路は奈良盆地内の少なくとも南北20km以上に施行された道路である。場所によって微地形などの要因で適時排水系を整備する必要があるはずであり、この規格の一貫性は当時の道路施工の精度を考える上で注目される。一方で、前記したように現在知られる成果から導かれる東側溝心の直線性がやや不安定であることも注意しておきたい。稗田から平城京六条の間で下ツ道が曲折している可能性が高いという指摘[20]もあるが、今回稗田一帯で算出された角度の振れはこの指摘と関連があるのだろうか。今後も資料の増加に合わせ随時検証を重ねる必要がある。また、これまで調査された京外の東側溝はどれも平安時代には埋没しているが、その後現在に至るまでどのような形態で道が変遷をしたのかは明らかではなかった。今回の調査でもその点を明らかにすることができていない。不明点が多い西側溝の様相もあわせ、今後の大きな課題となる。

2．平城京南方遺跡

今回の調査は店舗の建設を契機としたもので、開発内容などから調査区は小規模なトレンチとなった。しかし、調査の主目的であった平城京の関連遺構を検出するなど大きな成果を得ることができた。本節では、まず、調査区内の遺構の変遷についてまとめ、特に奈良時代の遺構についてはさらに別項を設けて既往の調査で明らかとなっている遺構との関連から検討を加えたい。

A　遺跡の変遷

調査区内では2面の遺構面を確認した。出土遺物から上層を中世以降、下層をそれ以前の時期に区分することができる。遺構の様相から、遺跡の盛期は奈良時代と判断できる。以下、奈良時代とその前後の時期とで項を設け、古い時期から順に記述する。

奈良時代以前　明確な遺構は確認されていないが、奈良時代の遺構である斜行溝07から弥生土器の小片が出土した。破片一点のみの出土だが、周辺での活動を示すものとして注意しておきたい。調査区の東南方では古墳時代の溝を多数確認しているが[21]、今回の調査区内では同時期の遺構や遺物を確認していない。遺物が出土していないが重複関係より奈良時代の遺構群に先行することが明らかな土坑13は弥生時代や古墳時代に属する遺構となる可能性もある。

奈良時代　この時期の主な遺構は調査区の中央付近に集中する。溝や掘立柱列が主体となる。各遺構の中心の国土座標値は表5にまとめた。遺構は重複関係より3段階で変遷することを確認した（図34）。1．斜行溝→2．下層素掘り小溝群→3．二本柱列遺構という順に変遷する。斜行溝07からは遺物がほとんど出土せず形成の時期を明らかにすることはできないが、上層から出土した瓦の小片により埋没時期を特定することができる。この溝が人為的に掘削されたものかは不明である。下層素掘り小溝群は、3.4～3.5mの一定間隔で整然と並ぶ東西溝を主体とする。分布の北限は明らかでないが、南限は溝09までとなる。各溝は同質の埋土であ

表5．遺構心国土座標値一覧

遺構		X座標	Y座標
二本柱列遺構		-149424.22	-18464.80
	北柱穴	-149423.40	-18464.85
	南柱穴	-149425.00	-18464.81
下層素掘り小溝群	溝01	-149412.78	-18460.00
	溝09	-149433.35	-18462.00
	溝02	-149413.46	-18461.30
	溝03	-149416.95	-18461.30
	溝04	-149420.32	-18461.30
	溝05	-149423.83	-18461.30
	溝06	-149427.25	-18461.30
	溝11	-149431.02	-18461.30
	溝10	-149425.00	-18463.14

（溝01は南肩の座標値）

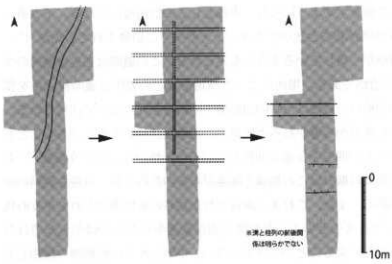


図 34. 奈良時代の遺構変遷模式図

ることから、ほぼ同時に埋没したと考えられる。掘削の目的は明らかにすることができないが、二本柱列遺構の周辺に集中するような分布状況は注目される。二本柱列遺構については、東方でおこなった調査成果[22]とあわせて次項で詳述する。これら前後関係が明らかな遺構群のほかで当該時期に属する遺構に東西方向の溝09がある。出土遺物が少なく、小片の割合が多いことから詳細な時期を明らかにすることができない。ただし、遺構の位置関係や埋没状況などから下層素掘り小溝群に先行するとは思えず、二本柱列遺構と近い時期あるいはそれ以後に掘削されたものと考えておきたい。溝09には人為的に埋め戻された痕跡をはっきりと確認することができず、ほかの奈良時代の遺構と異なり、その痕跡を一定期間地表に残していたと考えられる。また、溝09より南方は遺構の密度が希薄となり、遺構面を覆う遺物包含層中からの遺物量も少量となる。

中世以降　下層遺構面では奈良時代の遺構群廃絶後の遺構が確認されず、上層遺構面で中世以降の遺構を確認した。東西方向の溝01は調査区北端に位置し、南岸のみを確認した。ほぼ東西正方位に掘削された直線的な溝で、底直上から出土した遺物より室町時代以降に埋没したと考えられる。埋土上層の状況から人為的に埋め戻されたと判断することができる。また、同一の遺構面で素掘り小溝をいくつか検出している。溝01とこれら小溝群との関連は不明だが、下層の奈良時代の遺構群が完全に廃絶して痕跡を残さなくなってから一帯が耕地として利用されたことを示している。以降は遺物や遺構も希薄となる。現代まで耕地としての土地利用が中心となったのであろう。

B　二本柱列遺構の評価

度々述べてきたように、今回の調査で検出した二本柱列遺構は、東方約90mで調査された掘立柱遺構[23]の延長に位置し、一連のものと考えられる遺構である。この遺構は2005年の調査で初めて確認され、時期や位置から平城京の羅城と推定されているもので、今回の調査の主目的も調査地におけるこの遺構の有無の再確認と構造の把握にあった。そこで、過去の調査成果を参照にしつつ、今回検出した遺構の内容をまとめたい。これらの調査地を含めた九条大路周辺における既往の調査成果については、図35と表7にまとめた。

遺構の構造　まず、今回調査した遺構の構造について改めてまとめる。遺構は2条の東西方向の掘立柱列からなり、東西2間分を検出した。柱穴の心心間距離は南北が約1.6m（5尺）、東西が約2.7m（9尺）である。柱掘方は一辺0.6～1.1mの隅丸方形の平面形で、深さは検出面から35～50cmが残存する。柱はすべて抜き取られ、抜取穴には丸瓦や平瓦の小片が詰め込まれている。残存する柱痕跡から、柱の径は12～16cmであることがわかる。北列と南列を比較しても掘方や抜取りの規模などが酷似しており、二条の柱列をもって一連の構造物を構成しているとみることができよう。

東方の調査成果をみると、柱穴の心心間距離は南北で約1.5m（5尺）または1.8m（6尺）、東西

で約2.4m（8尺）または2.7m（9尺）とあり、2箇所の調査区にまたがって東西約80m分を検出している。また、「柱の直径は約30cm程度と推定され、掘方は一辺が1mに近い方形である」と報告されている。これらと今回の成果を比べると、柱間は若干のばらつきがあるが、ほぼ同一の規模といえる。柱掘方は、遺構略図にあるスケールを参照する限り、一辺1mに満たない規模のものも多く、大きな差がない。柱の規模は推定で、実寸でないため比較できない。抜取りの様相についての詳細は明らかでないが、丸瓦や平瓦の出土が報告されていることから今回の成果と同様の廃絶状況と思われる。以上より、東方調査区の柱列と今回検出した柱列は直線延長上に位置するだけでなく、遺構の規模や構造からも同一の遺構とみて問題がないと判断でき、今回の調査により東西約178m分を確認したこととなった。

表6．二本柱列遺構中心の国土座標値

位置	X座標	Y座標
今回の調査区	-149424.11	-18464.80
郡山市2005～2007年調査区西端	-149423.93	-18367.80
郡山市2005～2007年調査区東端	-149423.66	-18289.56

遺構の性格　この遺構は、発見以来、平城京の羅城であるとされてきたが、この想定に問題がないのか再度検証したい[24]。今回を含めた3箇所の調査区での成果を用いて、改めて遺構の造営方位を検討する。検討には各調査区で確認した同遺構の中心座標3点を用いる[25]（表6）。東方調査区の2点については柱掘方および柱抜取穴とみられる遺構の輪郭が良好に観察できる部分であり、数値として信頼が持てると判断した。この3点のそれぞれ最も近くを通る直線を算出すると、X=tan(0° 10′ 57.57″)Y-149365.37という式が導かれる[26]。3点の実測値と数式上の数値との差は7～13mmで、ほぼ直線であることがわかる。この式を基に、遺構を西に延長すると、羅城門の付近では門の推定中心点[27]の42cm南を通過する。よって、この柱列の中心が羅城門の中心付近に向かって直線的に伸びていることを再確認することができる。ちなみに、九条大路は今回の調査地に最も近い部分では羅城門のすぐ西で北側溝の検出例があり[28]、以西で確認された成果を含めて道路心の推定式が算出されている[29]。この式より九条大路を当調査地まで延長すると[30]、道路心と遺構中心との距離は約25mとなる。この推定式は道路の両側溝の心心間距離が45大尺（0.355m×45＝15.975m）で計算されており、当遺構と北側溝との心心間距離は単純に7.98m足すと約33mとなる。羅城門中心推定地と北側溝心との距離は32.53mとされ[31]、大きな相違がない。以上の計測から、当遺構が九条大路と並列する方位で造営され、羅城門の中心付近に接続する位置関係にある遺構である可能性がきわめて高いことを再確認することができる。それは、今更ではあるが、羅城門の両脇に存在し、都城の周囲を囲む城壁である羅城とみて良いだろう。

この遺構の東限は、平城京の条坊では東一坊大路東側溝の西方となることが判明している。羅城門の東脇から一連で造営されたものとみると総長約530mとなる。単純に右京城にも同規模のものが造られたと仮定すれば、総延長が1km以上の施設が造営されたことになる。ただし、その様相は端から端までが一様だったとは限らないだろう。今回の調査地の北西でおこなった県1985年[32]および奈良市508次調査[33]では幅が100m以上となる弥生～室町時代の南流する河川を確認している。この河川は現在の河川との位置関係より佐保川の旧流路に相当するものと考えられる。確実に奈良時代に該当すると思われる流れをみても幅が12mあり、この流れは今回の調査地西方約80mの位置で柱列と交錯すると考えられる。この部分がどのような構造であったかが一つの疑問となる。また、羅城門付近の遺存地割をみると、門東西のそれぞれ約330mが南に大きく張り出すような形状であることが早くから注目されてきた。この張り出しが奈良時代の土地利用と密接に関連するのであれば、今回調査した柱列とどのような関係となるのか、課題が残る。さらに、羅城門に近接する部分での構造も課題である。平城宮南面大垣をみると、朱雀門に接する付近では大垣の基底幅が広がり、門周辺の構造

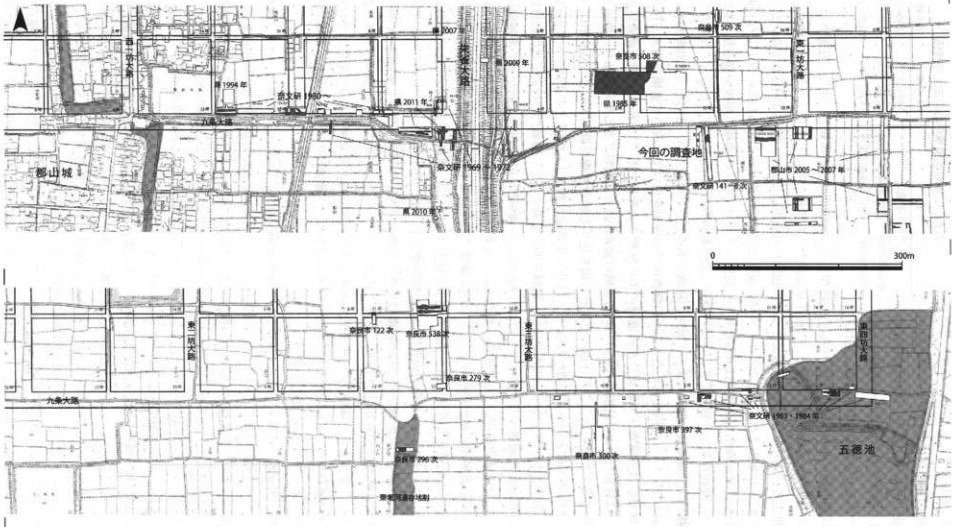


図 35. 九条大路周辺の既往の調査（1/6000） 奈文研 2003 『平城京条坊総合地図』を元に作成

が他と異なっている[34]。同様の状況は羅城門の周辺においても想定されるべきであり、注意が必要である。また、右京域の様相については、県2011年のような限られた調査例のみであり[35]、今後の大きな課題となる。

遺構の上部構造についてはさらに問題が多い。柱抜取穴の様相から、この遺構が瓦葺きの屋根を設けていたことは疑いない。今回の調査では軒瓦が出土しておらず、具体的な年代などに迫ることができる資料が少ない。また、瓦全体の出土量が多くないため、軒瓦が用いられていなかったかについては検証が難しい[36]。上部構造の具体的な姿について、既往の調査では築地状の構造物ではなく、掘立柱による柱建ちの建築物が想定されている。築地構造を否定する根拠として、①「築地の基礎となる部分は全く検出されておらず」、②「遺構面削平の可能性もほとんどない」と報告されている。②の根拠としてA.「羅城廃絶直後と思われる洪水砂層」が「部分的ながら羅城本体まで及んでいた」ことをあげる。さらに、B.本体とそれに関するとする「外濠」と「内濠」の3遺構が心心間だけでなく内法においても「小尺で除して完数になることから考えて、遺構面が大がかりな削平を受けている可能性はごく低い」ことをあげている。Aについては、洪水砂層は層単独では形成の年代を推定する際に慎重に判断する必要があり、羅城廃絶直後と断定するには根拠がさらに必要と思われる。Bについては後世の削平の有無に関する判断の根拠になっていない。つまり、②の根拠には検討の余地が多く、同時に①も確証がないことになる。よって、築地状の構造物の可能性を完全に排することには問題が無いわけでない。一方、県2011年調査では、検出した柱列が築地塀の寄柱となる可能性を提示している。この一帯は中世以降の土地利用により奈良時代の遺構面が大きく削平されていることが判明しており、柱の規模などから瓦葺き屋根を柱のみで支える強度を想定できないとすることが根拠となっている。今回の調査で検出した柱列をみると、柱掘方の規模は県2011年調査の柱列より一回り程度大きいが、柱の大きさはあまり変わらないため、同様の上部構造を想定することも可能である。しかし、遺構検出面の状況からは後世の削平の規模を推測することができず、築地状の構造となるか、柱建ちの掘立柱建物状の構造となるかの判断に窮する。現存する古代の建造物に類似する事例もなく、検証が困難である。

ところで、羅城の構造を示す記録としては平安京の羅城が知られている。『延喜式』左京職京程[37]によると、基底部幅が6尺、7尺の犬行をもち幅1丈の溝をもつとある。また、京の周囲を全周せずに南辺の一部に造られたものと理解されている[38]。記録が残らない平城京の羅城についても、それと大きく変わらない構造と考えられてきた。しかし、これまで羅城と想定できる柱列が検出された調査区においては、明確な築地状の痕跡は確認されていない。構成する柱列の配置が明確な左京域をみても、梁行が1.5（あるいは1.8）mの対になる掘立柱が東西に2.7mの間隔をもって整然と並んでいる状況を確認したのみである。築地を想定すると、その痕跡が明瞭に残っていないことと検出した柱穴が寄柱として適当なものかが問題となり、柱建ちの建物を想定すると、梁行となる柱間が狭く回廊状の空間を想定するには同規模の類例がないことが問題となる[39]。遺構の構造から平安京の羅城との関連を見出すことは難しい。

羅城門および羅城について緻密な検証を加えて復元をおこなった井上和人は左京九条四坊で検出された築地痕跡を羅城とし[40]、近年の成果を受けて、羅城門がある中央付近が単廊構造で、より装飾的な様相であったと想定している[41]。この築地構造の羅城の根拠となっている遺構は、今回調査した柱列の東延長には位置していない。この点については、九条大路遺存地割の傾きの問題もあり解釈が困難となっている[42]。図35に示したとおり、東一坊大路より東の九条大路付近ではこの左京四坊での築地遺構を除くと東西方向を指向する奈良時代の遺構が確認されておらず、今回検出した柱列と

表7．九条大路周辺の調査一覧

調査名	主な条坊関連遺構	文献
奈文研1969～1972年	羅城門基壇 九条大路（北側溝）・築地 朱雀大路（西側溝）・築地	奈文研編 1972『平城京羅城門跡発掘調査報告』郡山市教委
奈文研1980～	九条大路（北側溝）・築地 西一坊坊間路（西側溝） 西一坊坊間東小路	奈文研編 1981『平城京九条大路 - 県道城廻り線予定地発掘調査概報Ⅰ』奈良県教育委員会
奈文研1983・1984年	東西築地遺構・門・東西溝	奈文研編 1983～1985『市道九条線関係遺跡発掘調査概報（Ⅰ）～（Ⅲ）』奈良市教委
奈文研141－8次	東西溝	奈文研 1983「九条大路および京南辺部の調査 第141－8次」『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
県1985年	大規模河川	橿考研 1986「平城京左京九条一坊五坪・十二坪」『県概報1985年度（第二分冊）』
県1994年		橿考研 1995「平城京右京九条一坊十二坪（観世音寺推定地）の調査」『県概報1994年度（第一分冊）』
県2007年		橿考研 2008「平城京朱雀大路」『県概報2007年（第一分冊）』
県2009年	朱雀大路（東側溝）※図示範囲外	橿考研 2010「平城京朱雀大路東側溝・下ツ道東側溝」『県概報2009年度（第一分冊）』
県2010年		橿考研 2010「平城京南方遺跡（朱雀大路西側溝南延長推定地）」『県概報2009年度（第三分冊）』
県2011年	羅城関連遺構・朱雀大路（西側溝）	橿考研 2011「平城京羅城門発掘調査の概要」（報道発表資料）
奈良市122次	九条条間南小路（南側溝）・築地？	奈良市教委 1987「平城京左京九条三坊十一・十二坪の調査 第122次」『奈良市概報昭和61年度』
奈良市279次		奈良市教委 1994「平城京左京九条三坊十二坪の調査 第279次」『奈良市概報平成５年度』
奈良市296次	東堀河	奈良市教委 1995「平城京外　東堀河の調査 第296次」『奈良市概報平成６年度』
奈良市300次		奈良市教委 1995「平城京左京九条四坊・九条大路の調査 第300次」『奈良市概報平成６年度』
奈良市397次		奈良市教委 1998「平城京九条大路の調査 第397次」『奈良市概報平成９年度（第１分冊）』
奈良市508次	大規模河川	奈良市教委 2006「平城京跡（左京九条一坊十二坪）の調査 第508次」『奈良市概報平成15年度』
奈良市509次	東一坊坊間東小路（東側溝）	奈良市教委 2006「平城京跡（左京九条東一坊坊間小路）の調査 第509次」『奈良市概報平成15年度』
奈良市538次	九条条間南小路・築地？ 東三坊坊間東小路	奈良市教委 2008「平城京跡（左京九条三坊十一・十二坪）の調査 第538次」『奈良市年報平成17年度』
郡山市2005～2007年	羅城関連遺構 「十条」条坊遺構	山川均・佐藤亜聖 2008「平城京・下三橋遺跡の調査成果とその意義」『日本考古学』第25号 岡 2009「下三橋遺跡第２次調査について」『都城制研究（３）古代都城と条坊制－下三橋遺跡をめぐって－』奈良女子大学21世紀 COE プログラム報告集 Vol.27

調査名は図35に対応

築地遺構の関係について明確な解釈は得られていない[43]。羅城の全体像を解明するには、近接して確実に存在していたと考えられる九条大路に関連する資料の増加も必要となるだろう。

溝09との関係　柱列の付帯施設については、今回の調査区内では確実に共伴すると判断できる遺構を確認していない。唯一可能性のある遺構には柱列の南を並列する溝09がある。溝09は、断定はできないが、柱列に先行する遺構群よりは後出すると思われる。しかし、出土遺物からは柱列との先後関係を明らかにすることができず、同時期に機能した遺構としてよいか判断することができない。粘土質の埋土からはあまり水流がなく、ゆるやかに埋没していった状況が想定される。柱をすべて抜き取って不用な瓦とともに埋め戻した柱列とは廃絶の様相がやや異なる。両遺構の位置関係を再確認すると、心心間距離が約9.1m、柱列中心と溝南岸との距離が約11m、柱列南柱穴と溝北岸との距離が約6.4mである。この遺構について既往の調査成果と比較をしてみる。すぐ東でおこなった奈文研141－８次調査では、不整形の東西方向の溝が延長上にある。ただし、規模や形状が異なり、同一のものかは明らかでない。2005～2007年大和郡山市調査では、柱列の南北両側に並列する溝が検出されている。しかし、両溝は柱列の東端まで一連でのびずに途中で途切れている。このうち南側の溝は、柱列と溝との位置関係や溝の規模が今回の溝09と類似するが、遺物の出土状況や廃絶の様相が異なることから注意が必要である。また、北側の溝に対応する遺構は今回の調査地には存在していない。これまで柱列と両溝が一連の企画で設定されていることを前提に議論が進められてきたが、この点については再検討が必要である。県2001年調査により右京域で確認した柱列は北側に東西溝が並列し、羅城の内濠と想定されている。しかし、前述のように、羅城門に近接する一帯と今回の調査区一帯の様相を単純に比較することには問題もあり、柱列と並列する各溝の関係については、今後に課題を残す。

遺構の時期　今回の調査では、柱列や直接重複する遺構に年代を推定することができる遺物の出土状況を確認することができなかった。よって、遺構の年代については既往の成果を参考に考えなければならない。2005～2007年大和郡山市調査区検出の柱列からも顕著な遺物の出土状況はみられな

かったようだが、年代を決定する上で重要な遺構の重複関係を確認している。それは「東一坊大路西側溝」の埋没後に柱列の柱穴が掘られ、多量の土師器皿や土馬、墨書人面土器が出土する土坑によって柱列が破壊されていることである。「十条」条坊の側溝は、人為的に埋め戻されたと報告されており、出土土器は平城宮土器Ⅰ～Ⅱ[44]に属するようである。柱列と直接重複関係がある側溝からの出土遺物については詳細が明らかでないが、造営年代を考える上で重要である。廃絶後の土坑は長岡京遷都後とある。以上の状況から、現時点では羅城の造営を平城宮土器Ⅱ併行期以降[45]とみることで留めておきたいが、今後の資料の増加に期待したい。

柱列周辺の遺構　今回の調査区では、奈良時代の溝（下層素掘り小溝群）が柱列に先行して掘削されていることを確認した。これらの溝は柱列造営時の一つの工程による所産である可能性も考えられるが、「十条」条坊との関連も含めて考察する必要もあり、今後の大きな課題となる遺構である。また、今回の調査では検出していないが、柱列の廃絶期を示す土坑について、大量の土器類を伴う同様の土坑は、「十条」条坊道路の路面や、左京九条一坊十二坪[46]でも確認されている。これらの時期は平城宮土器Ⅲ併行期から奈良時代後半の建物の廃絶後まで幅があるが、京の南辺一帯で普遍的に分布する土坑である可能性もある。すべてを一概にまとめることはできないが、遺物やその出土状況から祭祀的な性格も想定される遺構であり注意しておきたい。

左京九条大路との関連　先述のように羅城には南京極大路である九条大路が近接して位置していたと考えられるが、この九条大路についてはこれまで明確に遺構を検出した例が少ない。図35に示したように、右京では九条大路の北側溝が一定距離で確認されているが、左京では一例も確認されていない。また、南側溝は左京・右京ともに確実な事例がない。特に、2005～2007年大和郡山市調査における東二坊坊間西小路付近に設けた南北に長い調査区で、まったく条坊関連遺構が確認されていないことは看過することができない。奈良市122次や同538次では九条条間南小路の側溝と判断できる溝を検出しているが、左京域では「十条」関連条坊を除くとこの側溝が最も南端での条坊側溝の検出事例となっている。羅城の北側に並列する溝が存在するならば、それは九条大路南側溝とどのような関係にあったのか、大きな問題である。現在確認されている羅城とみられる柱列には、北側に溝がある部分と無い部分がある。また、今回の調査区の溝01のように、やや近い位置に後世の遺構面から溝が掘りこまれた例もあり、資料が少ない現状では解決できない問題が多数存在している。特に確実な事例が存在していない左京域での事例の増加を待ちたい。

3．おわりに

以上、稗田・若槻遺跡と平城京南方遺跡の2遺跡でおこなった発掘調査成果についてまとめと評価をおこなった。成果は多岐にわたるが、両遺跡ともに古代の奈良盆地における土地開発を考える上で重要な遺構を確認することができた。稗田・若槻遺跡の下ツ道関連遺構と平城京南方遺跡の二本柱列遺構である。

稗田・若槻遺跡では下ツ道の東側溝を検出し、規模や方位、廃絶の時期など既往の調査例を再検証することができた。また、西側溝は確認できなかったが、想定位置の西側に並列すると思われる溝を確認した。道路関連遺構の調査例は今回の例を含めても、奈良盆地を縦断する道路の総延長からみるとほんの一部でしかない。さらに、この道路は古代に設置されて以降、現在まで姿を変えながら使用され続けてきた。2次にわたる調査成果の報告に過去の事例を含めて検討を加えたが、遺構の実態には追りきれていない。

平城京南方遺跡検出の二本柱列遺構については、既往の調査例を加えて再検討し、この遺構を平城京の羅城とみて良いことを再認識することができた。一方、上部構造を含めた遺構全体の構造については新たな見解を提言するにはいたらなかった。遺構の評価については発見以来、活発な議論がおこなわれてきた。今回は新しい調査成果を踏まえて課題を抽出したにすぎないが、今後の研究の一助となると幸いである。報告中ではほとんど触れなかったが、羅城の問題は左京「十条」条坊の問題とも密接に関連していることは言うまでもない。そして、この問題は京南辺条条里の問題にもつながっている。今回の調査を含め、近年になり羅城や京南辺に関する重要な成果が相次いでおり、その実態について再検討が迫られていると言えよう。

このように、今回報告する調査成果は、派出する諸問題が単に一地域の土地開発の問題で終わらず、開発主体に律令国家が深く関与していることからも、古代における国家の実態に迫る上でも重要な成果と評価することができる。しかしながら、遺構の評価については先学の研究に大部分を負いながら若干の検討を加えたに過ぎない。また、本報告における検証は、各遺構の一部分から導かれたものである。今後も増加する資料によって検証を加えていくことで、それぞれの実態により迫ることができるだろう。

註

1）橿考研編 1980『大和国条里復原図』奈良県教育委員会
2）小字の名称についても註1文献を参照した。
3）道路は現在も位置を踏襲して利用されている部分が多く、日本書紀などに記載があることや奈良盆地に施工された条里地割の基準となっていることなどから早くから注目されてきた。この道路について、上ツ道、中ツ道などの古道や平城京、藤原京などの都城との関連から古代の都市計画において重要な道であるという評価を与えるまでに考究したのは岸俊男であり、以降の研究に大きな影響を与えた（岸俊男 1969「大和の古道」『日本古文化論攷』、のち同1988『日本古代宮都の研究』岩波書店に所収）。1978年から「歴史の道の再発見と整備のための方策」として古道の多角的な調査がおこなわれ、下ツ道もそのテーマに取り上げられた。その調査成果は、上田正昭編 1988『探訪　古代の道　第一巻』法蔵館、にまとめられている。以後も古代の道路交通や開発、また条里制の研究においても重要視され、多くの研究があるが、ここでは割愛する。なお、近年増加した発掘調査資料や研究史をまとめて、道路の設定時期に迫った論考に、近江俊秀 2009「下ツ道考－大和における正方位直線道路の成立時期をめぐる検討－」『古代文化』61－2、がある。
4）今回の調査地の南240mでおこなわれた調査が参考になる（橿考研 1982『神田・若槻遺跡発掘調査概報』『県報報1980年度（第二分冊）』）。
5）第Ⅱ章でも述べたが、この溝状遺構についてはあまり記録が残っておらず、様相が明らかでない。
6）奈文研編 1974『平城京朱雀大路発掘調査報告』奈良市
7）前掲註4文献
8）坂靖 2006「下ツ道の転変」『八条遺跡』奈良県立橿原考古学研究所報告第94冊 橿考研
9）本書作成中におこなわれた八条北遺跡の調査でも、心心間距離23mの東西両側溝をもつ下ツ道を確認している（橿考研 2011『天理市・大和郡山市　下ツ道（八条北遺跡）発掘調査現地説明会資料』）。
10）木全敬蔵 1987「条里地割の計測と解析」『奈良県史　第四巻　条里制』名著出版
　足利健亮 1988「下ツ道の拡がりとうつろい」『探訪　古代の道　第一巻』法蔵館、では、下ツ道を含む条里地割から条里の幅109m×2を引いた43mを下ツ道の幅員としている。
11）前掲註4文献。なお、八条遺跡や八条北遺跡で検出した西側溝はいずれも幅1～2mで、1980年調査区よりも小規模なものである。
12）註8にある『八条遺跡』
13）註9にある調査でも「西側溝」が3本検出されている。奈良時代のものと考えられる東側溝との心心間距離23mの溝の西に東側溝からの心心間距離が26mとなる南北溝がある。どの調査においても西側溝は遺物の出土が少なく、時期の判断が困難となっている。一方、平城宮・京で検出される下ツ道の西側溝西方では、調査の制約などもあり同様の遺構の明確な検出例がない。今後の課題である。
14）大和郡山市域より南方では藤原京に関する調査でいくつか検出例があるものの、正式な報告がある例が少ない。また、藤原京以北で天理市二階堂付近より南では、近世以降中街道として現在まで道路として継続的に用いられていることもあり、調査事例がない。今回の検証では資料が一定量ある八条遺跡以北を対象としたい。
15）以下、本節（下ツ道関連報告）の検証で求める式は表4の数値をもとにしたもので、日本測地系による。
16）入倉徳裕 2009「京南辺条条里と平城京朱雀大路・下ツ道の関係について」『条里制・古代都市研究』第25号

17) 前掲註10本文文献

18) 北方でおこなった都山市1983年調査の報告の際にも一群の遺構から求められる傾きが従前の成果と合致しないことを指摘している。(都山市教委 1992『神田環濠　付、下ツ道第2・3次発掘調査報告』都山市報告第3集)

19) 奈文研編 1982『平城京朱雀大路発掘調査報告』奈良市教委

20) 前掲註16文献

21) 奈文研 1983「九条大路および京南辺部の調査　第141-8次」『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』

22) 山川均・佐藤亜聖 2008「平城京・下三橋遺跡の調査成果とその意義」『日本考古学』第25号

23) 前掲註22文献。この文献以降で同調査の成果として公刊された文献には、山川均・佐藤亜聖 2009「下三橋遺跡第2次調査について」『都城制研究（3）古代都城と条坊制―下三橋遺跡をめぐって―』奈良女子大学21世紀 COE プログラム報告集 Vol.27、がある。2009年文献は「十条」条坊関連遺構の報告と京南辺条条里の解釈が中心となっているため、本節では、この調査の「羅城」関連遺構に関する成果は註22文献を基とする。
ところで、「十条」条坊関連遺構の年代観について、2009年文献では新たな資料が追加された。すなわち、道路側溝出土遺物について、註22文献には「平城Ⅱ期」(奈文研による平城宮土器編年での「平城宮土器Ⅱ」を示していると思われる。小沢毅 2009「平城京左京「十条」条坊の位置づけをめぐって―条里との関係および羅城門造営年代の再検討―」『都城制研究（3）古代都城と条坊制―下三橋遺跡をめぐって―』奈良女子大学21世紀 COE プログラム報告集 Vol.27、でも指摘。)とあったが、2009年文献では「十条」条坊道路上で検出した遺構から出土する土器について、「平城Ⅲ期前半」(同様に「平城宮土器Ⅲ」で、中でも細分し藤ノ木遺跡以前の土器群とされる一群を示しているのか。)と報告している。この遺構は道路の廃絶後のものとされ、「変動の余地を残す」としながら「十条」条坊関連遺構の廃絶時期を示す資料としている。羅城の造営と深く関わる問題でもあり、注目される。平城京九条大路以南の条坊関連遺構の性格については現在も議論の最中であることから、「十条」と括弧付きで表記する。

24) これまでの報告によると、平城京復元条坊との位置関係から羅城としているが、遺構そのものの分析はあまりおこなわれていない。註22文献では遺構の角度偏差を求めているが、この計算は羅城門推定位置の中心座標と検出遺構の2点を根拠としている。検出遺構の傾きを求めずに、未検出の推定位置との比較によって導く手法には問題がある。

25) 東方の調査区の数値については、今回の検討にあたり調査担当から教示を得た。数値は世界測地系。

26) この式から導かれた遺構の傾きは、既往の調査から導かれる平城京条坊遺構の傾きと大きな差がない。平城京の条坊については近年の調査事例を加え再整理した入倉徹裕による分析がある（入倉徹裕 2008「平城京条坊の精度―左京域を中心に―」『平城京左京三条三坊五・十二坪』奈良県文化財調査報告書第131集　橿考研）。氏の分析によると、東西条坊の国土座標における方位の平均は−11′12″、直近の条坊遺構である九条大路4点（ただし右京域のみ）の方位は−11′31″とあり、今回の計算結果による方位と近い数値を示している。ただちに今回得られた数値の妥当性や各遺構間の設計における規緒性を示すものではないが、参考となる数値である。

27) 羅城門は現在の佐保川河床に位置し、実際の遺構としては門基壇の北西隅が確認されたのみである（奈文研編 1972『平城京羅城門跡発掘調査報告』都山市教委）。調査報告では門の規模を梁行2間・桁行5間に復元している。井上和人はその後の周辺での条坊遺構調査例の増加を基に再検討をおこない、梁行2間・桁行7間に復元している（井上和人 2004「平城京羅城門再考―平城京の羅城門・羅城と京南辺条条里―」『古代都城制条里制の実態的研究』学生社・初出は1998『条里制古代都市研究』第14号)。今回の検証では後者の座標値を参考とした。ただし、既往の成果は日本測地系による数値で算出されている。よって、座標値については奈文研の平城地域における測量法改正に伴う対応に準じ、日本測地系→世界測地系で X＋346.4m、Y−261.3mとして計算を進めた（奈文研 2005「測量法改正（世界測地系導入）に伴う測量業務の対応」『奈良文化財研究所紀要2005』)。実際の遺構が確認されていない現状では門の規模に関する両説について踏み込んだ議論が難しい状況にあるが、ここでおこう検討で要求される羅城門推定位置の精度を考えるとどちらの説であっても影響がない。それを踏まえると40cm前後のずれは、今回対象とする遺構の規模に対する実測値の少なさやそれに伴い想定される誤差を考えると大きなずれとして問題視する必要は無いと考える。

28) 前掲註27奈文研編1972年文献。朱雀大路西側溝と九条大路北側溝が合流する部分で、両側溝と並列する築地遺構を確認しており、この溝を同大路北側溝とする遺構の評価に関連いはない。

29) 註26文献より X=tan(11′31″)Y-149684.51（日本測地系による)。

30) 左京域は九条大路の検出例がなく、道路の遺存地割の傾きが大きいという指摘（奈文研編 1983『市道九条線関係遺跡発掘調査概報（Ⅰ）』奈良市教委、前掲註27井上文献）もある。今回の対象地は朱雀大路からさほど距離が離れていないこともあり、右京域でも朱雀大路に近い部分の成果を基にした推定式をこの検討で用いても大きな問題がないと考える。

31) 註27井上文献

32) 橿考研 1986「平城京左京九条一坊五坪・十二坪発掘調査概報」『県概報1985年度（第二分冊)』

33) 奈良市教委 2006「平城京跡（左京九条一坊十二坪）の調査　第508次」『奈良市概報平成15年度』

34) 奈文研 1978『平城宮発掘調査報告IX―宮域門・大垣の調査―』奈文研学報第34冊

35) 2011年、壁川皮修事業の事前調査として、羅城門の西隣接地で発掘調査がおこなわれ（図35・県2011年)、当遺構に関する重要な成果があった。正式な概報や報告が刊行されていないが、報道発表に伴う発表資料（橿考研 2011『平城京羅城門発掘調査の概要（報道発表資料)』）が公表されている。この調査では、羅城門の西方でも掘立柱列を検出し、羅城関連遺構と判断された。検出した柱列は東西5間分で、一辺約40cmの柱掘方で柱の太さは10～15cm。掘方の底部には礎板を設け、柱間は2.7m。今回報告する柱列とは、柱掘方や柱の底部の構造が若干異なるが、柱の規模や間隔は類似している。この柱列の南1.2mの位置で、対になるような柱穴を2箇所確認しているが、調査区の制約もあり、南側の柱穴に関しては評価を保留している。若干の差異はあるものの、右京域でほぼ同様の位置関係となる柱列を確認した意義は大きい。公表された北側の柱穴の位置は、本節で検討した柱列中心を通る直線式の延長に対し、29cm北側になる。今回検出し

た遺構の直線延長上にあるとみても大きな問題はないだろう。

36）註22文献によると、東方の調査区付近では瓦の出土状況から軒瓦が使用されていない可能性が高いとされている。

37）吉川弘文館 1936『新訂増補国史大系』第26巻

38）財古代学協会・古代学研究所編 1994『平安京提要』角川書店

39）柱間の規模だけみると、平城宮内の事例などからは築地の寄柱とみた方が適当な規模に思える。

40）前掲註27井上文献。築地遺構は註30文献による。

41）井上和人 2010「羅城」『図説平城京事典』 柊風舎

42）註27井上文献に京南辺条条里南端の横きと九条大路遺存地割の横きが類似するという分析がある。2005～2007年大和郡山市調査では辺条条里の地割の下より、現在地割として残存していない「十条」条坊関連遺構を確認している。辺条条里はこの「十条」条坊の廃絶後に設定されたと考えることができ、九条大路の遺存地割がこの辺条条里の地割と緊密な関係にあることは、地割が形成された原因となる土地利用の変遷を考える上で注目される。

43）註22文献では異なる施設と考えている。註23小澤文献では東一坊大路周辺の遺存地割が南へ張り出すことに注目し、羅城がクランクする可能性も残るとする。

44）2005～2007年大和郡山市調査の土器の年代観に関しては註23にあるとおり。

45）平城宮を囲う大垣も遷都当初は仮設的な掘立柱塀で後に築地塀に改修しているように、宮・京の造営が遷都後にも継続しておこなわれていたことが既往の調査から明らかとなっている。このような造営の事情や文献に残る記録も参考にしながら考察を進める必要がある。

46）前掲註32文献

文中では各氏の敬称を省かせていただきました。末文ながら失礼をお詫び申し上げます。

写真図版

昭和 38 年撮影空中写真
（上が北）

1．調査区全景（西から）

2．調査区全景（北東から）

3．下ツ道（南西から）

1. 下ツ道（南東から）

2. 下ツ道路面（北東から）

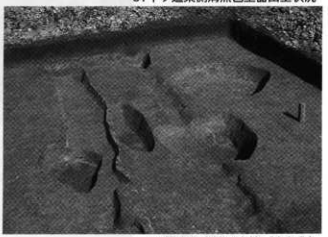
3. 下ツ道路面上の堆積

4. 下ツ道東側溝（東から）

5. 下ツ道東側溝の堆積

6. 下ツ道東側溝黒色土器出土状況

7. 下ツ道東側溝西方の小溝


8. 調査区東端の土坑（南から）

1．調査地遠景（北西から）

2．調査地遠景（南東から）

1．東西両地区合成

2．西地区全景（南東から）

3．東地区全景（南西から）

1．西地区 1tr.（北から）

2．西地区 2tr.（北から）

3．西地区 3tr.（北西から）

4．西地区 3tr.（南東から）

1．西地区 3tr. 溝1・2
（手前が溝2、北から）

2．西地区 3tr. 溝1（東から）

3．西地区 3tr. 溝2（西から）

1．西地区 3tr. 溝１底の遺物出土状況

2．東地区 1tr.（西から）

3．東地区 1tr. 溝１（北から）

1．東地区 2tr.（西から）

2．東地区 2tr. 溝1（北から）

3．東地区 2tr. 土坑1（北から）

4．東地区 3tr.・4tr.（西から）

1．東地区 4tr.（北東から）

2．東地区 4tr. 溝1・2（南東から）

3．東地区 4tr. 溝3（北から）

1．調査区全景（南から）

2．調査区全景（北東から）

3．調査区北半（南東から）

1．二本柱列遺構周辺の
遺構検出状況（東から）

2．二本柱列遺構（東から）

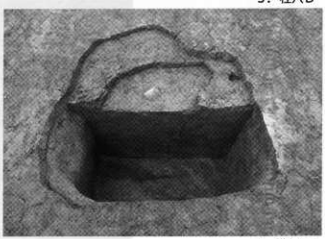
3．二本柱列遺構（西から）

1．二本柱列遺構と溝 09（北西から）

2．柱穴A

3．柱穴B

4．柱穴D



5．柱穴E

二本柱列遺構の各柱穴

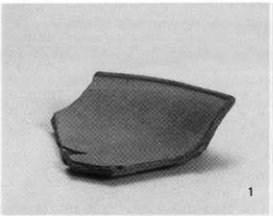
1．溝 09（東から）

2．溝 01（東から）

3．土坑 12（北から）

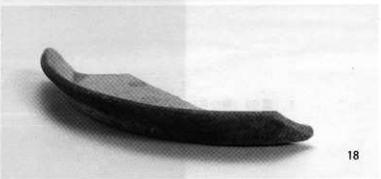
図版 14

稗田・若槻遺跡1997年度 下ツ道東側溝出土土器類①


1

24

16


18

14

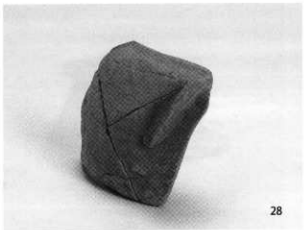
21

20

10

19

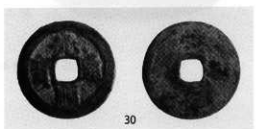
稗田・若槻遺跡1997年度 下ツ道東側溝出土土器類②、包含層出土銭貨

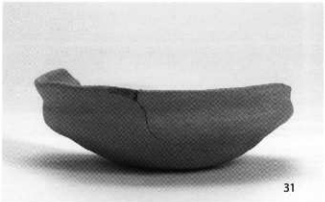

28

27

8

29


30

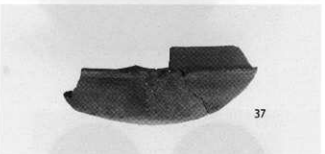

31

32

35

34

33


37

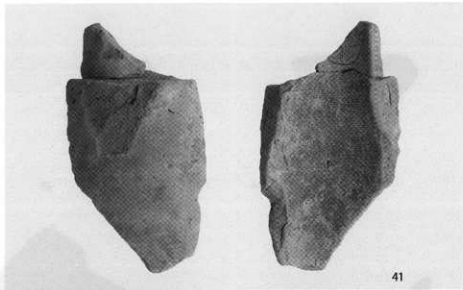
31 ～ 35・37：東 4tr. 溝 3

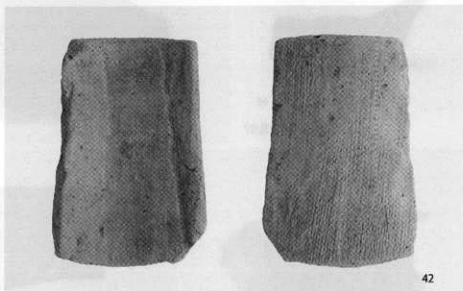
38

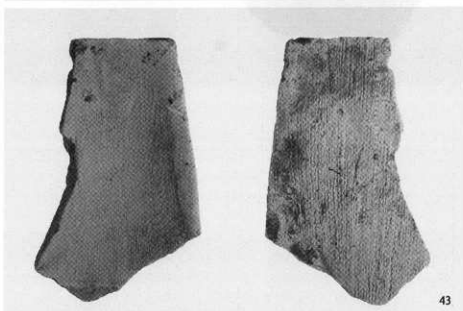
39

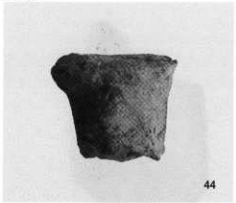
39：東 1tr. 土坑 2

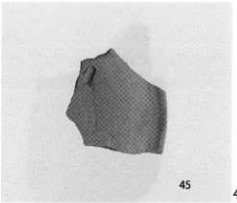
38：西 3tr. 溝 1


41


42


43


44


45

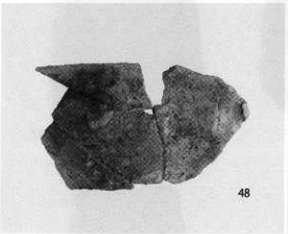
44・45：包含層

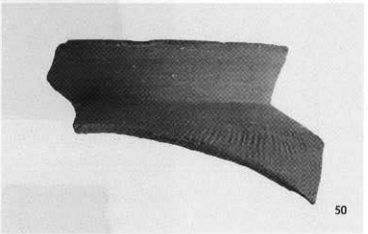
46

46：斜行溝 07

47

47：溝 01


48


50

48：溝 09
50：溝 10

報告書抄録

ふりがな	ひえだ・わかつきいせき　へいじょうきょうなんぼういせき
書名	稗田・若槻遺跡　平城京南方遺跡
副書名	
シリーズ名	大和郡山市文化財調査報告書
シリーズ番号	19
編著者名	十文字健（編）、濱口芳郎
編集機関	大和郡山市教育委員会
所在地	〒639-1198　大和郡山市北郡山町248-4　TEL　0743-53-1151
発行機関	大和郡山市教育委員会
所在地	〒639-1198　大和郡山市北郡山町248-4　TEL　0743-53-1151
発行年月日	2012年7月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
ひえだ・わかつきいせき 稗田・若槻遺跡	ならけんやまとこおりやまし 奈良県大和郡山市 ひえだちょう 稗田町	29203	-	34° 38′ 17″	135° 47′ 41″	19980210 ～ 19980323	200	市道高田稗田美濃庄線建設
						20071126 ～ 20080216	650	
へいじょうきょうなんぼういせき 平城京南方遺跡	ならけんやまとこおりやまし 奈良県大和郡山市 しもみつはしちょう 下三橋町			34° 39′ 10″	135° 47′ 56″	20110804 ～ 20110824	190	給油所・コンビニエンスストア建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
稗田・若槻遺跡	集落	弥生時代 飛鳥時代 奈良時代	道路、溝、土坑	弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、小型模造土器、瓦、銭貨	下ツ道東側溝をはじめ、道路に関連する遺構を検出。
平城京南方遺跡	都城	奈良時代	柱列、溝、土坑	弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、丸瓦、平瓦	平城京羅城と考えられる柱列を検出。 柱列に先行する奈良時代の素掘り小溝群を検出。

稗田・若槻遺跡
平城京南方遺跡

大和郡山市文化財調査報告書　第19集

2012年7月31日発行

編集発行　大和郡山市北郡山町248-4
大和郡山市教育委員会

印　　刷　奈良市三条大路2丁目2-6
共同精版印刷株式会社